



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2020@オンライン

(通算34回目)

「遊んで、笑って、世界を変える」

報告書

- 日 時：2020年12月6日(日)～12日(土)
- 会 場：Zoom (テレビ会議システムを使ったオンライン開催)
- 主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 後 援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、ESD 活動支援センター
関東地方 ESD 活動支援センター、NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議
一般社団法人日本環境教育学会
- 協 賛：株式会社サンエー印刷
損害保険ジャパン株式会社
公益財団法人 SOMPO 環境財団
損保ジャパンパートナーズ株式会社
J-POWER (電源開発株式会社)
日能研
株式会社日本旅行
株式会社みくに出版

目 次

開催趣意	1
スケジュール	2
開会式	3
全体会	4
全体会 1「自然遊びで育つ“たくましさ”」	4
全体会 2「世界の環境教育から学ぶ」	7
参加者企画ワークショップ	10
12/8（火）	10
12/9（水）	13
12/10（木）	15
10分プレゼンテーション	20
その他の企画	22
清里ミーティングこれまでの実績	25

開催趣意

清里ミーティングは、1987年9月、自然体験・野外教育・環境教育に関心を寄せる人たちが山梨県清里に集まり「第1回清里フォーラム」を開いたことからスタートした。毎年、自然学校等の環境団体、企業、行政、教育機関等から約200名の関係者が参加し、環境教育に関心のある人たちの交流の場として30年続いてきた。環境分野以外の多様なステークホルダーとの協働も目指し、広く「持続可能な社会に貢献するひとづくりに携わる人たちの学び合いの場」として、多様性とパートナーシップによって環境問題・社会課題解決のヒントを探る。2018年には、「平成30年度持続可能な社会づくり活動表彰」（主催：公益社団法人環境生活文化機構）にて環境大臣賞を受賞した。

2020年は34回目の開催として、12月6日（日）～12日（土）の一週間にわたり、オンライン（Zoom等）で実施した。

■ 清里ミーティングの目的

1. 最先端の情報や手法を学ぶ場を提供し、参加者の活動をエンパワメントする。
2. 参加者同士のネットワークを構築し、協働を促進する。
3. 1、2をもって持続可能な社会に向けて行動する人を増やす。

2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）に向け、環境教育だけではなく、他分野とのパートナーシップがより重要となってくる。清里ミーティングも環境教育以外のより広い分野からの参加者を募り、新しいコラボレーションが生まれることをねらっている。お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的としている。

■ 清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者が“主役”であること。どのようなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持つ。主催側で企画したプログラムのほかに、参加者の中からプログラムを企画・実施する方を募って開催している。

■ 今年の特徴

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年はオンラインで日本、そして世界をつなぎながら、新たな環境教育の可能性を探っていく。また、期間を従来の2泊3日から1週間に延ばしたり、子ども参加可能なワークショップを設定したりすることで、多様な参加ニーズに応える“誰ひとり取り残さない”ミーティングを目指した。

SDGsのような複雑に絡み合う現代の諸問題を解決していくために必要な、豊かな想像力と柔軟な創造力。私たちは、それを自然の中で遊び、自然から学ぶことで身に付けてきた。遊びはずっと変わらず身近にあるが、どんどん自然から遠いところで行われるようになっていく。

「自然から遠ざかれば、心は固くなる」という、ネイティブアメリカンに伝わる教えがあるが、固くなった心でいくら考えても、世界をトランスフォームするような創造的なアイデアは出てこないと考える。不安の多い時代だからこそ、「遊び心」を大切に、環境教育や自然体験の取り組みから、世界を変える楽しいアクションを生み出すことを目指した。

スケジュール

日 時： 2020年12月6日（日）～12日（土）
 会 場： Zoom（テレビ会議システムを用いたオンライン開催）
 主 催： 公益社団法人日本環境教育フォーラム

■ タイムスケジュール

	6（日）	7（月）	8（火）	9（水）	10（木）	11（金）	12（土）
10:00 -11:30		10:30-12:00 理事×リジ ×リジ=?	参加者企画ワークショップ				10:00-12:30 10分プレゼン
11:30 -14:00	13:00 開会式						
14:00 -15:30	14:00-16:00 全体会1	13:00-15:30 長沢裕× 辻英之特別ws					閉会式
16:00 -17:30							15:30-17:00 ふりかえり会
18:30 -20:00	17:30-20:00 情報交換会	18:30-21:00 市民のための 環境公開講座 & 特別座談会					
20:30 -22:00						20:00- 自然学校 NIGHT	

■ オンラインプロフィール集

例年の清里ミーティングでは、参加者メンバーの「プロフィール集」を紙資料として配布していたが、今年度はオンライン開催のため「Proff: (オンラインプロフィールページ作成サービス)」を用いて参加者のプロフィール集を作成した。



加藤 超大
日本環境教育フォーラム事務局長

📅 1989/9/29
📍 東京都荒川区西日暮里5-38-5日暮里ビル1F
☎ 03-5834-2897
✉ kato_tatsuhiro@jeef.or.jp
🌐 <http://www.jeef.or.jp>

ABOUT ME

日本環境教育フォーラム（JEEF）事務局長の加藤超大です。

昨年11月に事務局長に就任してから1年を迎えました。新型コロナウイルスの影響もありバタバタしていますが、皆さまの支えもあり無事に1年目を終えることができました。（今は事務局長2年生です！）ありがとうございます。

今年の清里ミーティングは初めてのオンラインに挑戦しています。オンラインであっても参加者の皆さまが互いに学び合える場を提供してまいります！ご期待ください！！

【プロフィール】
大学卒業後に青年海外協力隊（職種：環境教育）として中東・ヨルダンへの派遣を経て、2014年よりJEEFに。入社後は বাংলাদেশ やカンボジアでの海外事業に携わり、2019年11月より事務局長に就任しました。

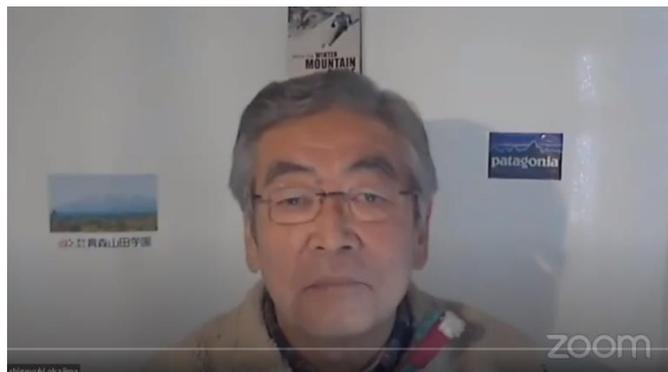
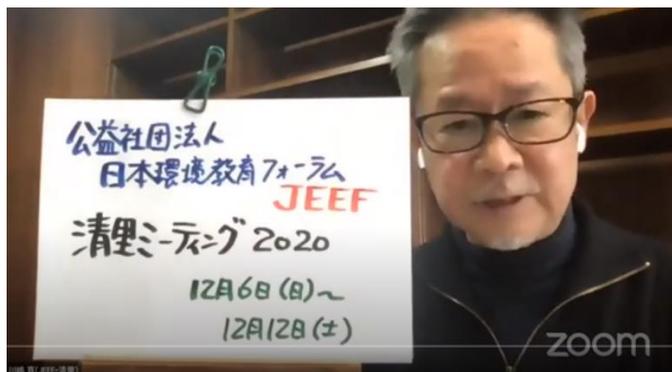
📱 tatsuhiro.kato.7/

Proff ページサンプル

開会式

開会式 ※敬称略

司 会 : 公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF) 理事長 川嶋 直
主催者挨拶 : 公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF) 会長 岡島 成行
挨拶 : 環境省 環境事務次官 中井 徳太郎



また、JEEF 事務局長の加藤から参加者の皆様へ一週間のスケジュールを紹介した。



全体会

全体会1「自然遊びで育つ“たくましさ”」

自然災害や新型コロナウイルスなどの非常事態の際に試される社会のレジリエンス（※）。工夫して遊ぶことができない子どもたちや、自分で状況判断ができず SNS などの不確実な情報に流される社会は、気候変動よりも先に社会が崩れることさえ予感されます。また、いじめや不登校、休職・離職者の増加など、子どもから大人まで心のレジリエンスも大きな問題となっています。そういった現代社会の状況に対して、私たちは自然の中でどのようなアプローチができるのか。今だからこそ強調したい自然遊びの効果について考えます。

※災害やストレスなどの外的な刺激に対する柔軟性・耐久性を表す言葉

ファシリテーター：

鴨川 光 （公益社団法人日本環境教育フォーラム [JEEF]）

ゲストスピーカー：

- ① 本田恵子 氏（早稲田大学 教育学部 教授）
- ② 山路歩 氏（NPO 体験学習研究会 代表理事）
- ③ 神保清司 氏（NPO 法人千葉自然学校 南房総市大房岬自然の家 所長）

※敬称略

（鴨川） 全体会1へご参加いただき誠にありがとうございます。進行を務めます日本環境教育フォーラムの鴨川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

清里ミーティングは自然体験、野外教育、環境教育に関心を寄せる人たちが山梨県清里に集まり、持続可能な社会の担い手作りを目指して学び合う場として 1987 年から開催してきました。34 回目となる今年は感染症対策のためオンライン開催となりますが、清里ミーティング最大の特徴である『参加者の皆様が主役』というスタイルを大切に、皆様と充実の 1 週間を作り上げていきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

まず今回の全体会ですが、『自然遊びで育つたくましさ』というテーマで 3 名のゲストと共にお送りしていきます。SDGs やその達成を目指す ESD for 2030 など持続可能な社会の担い手作りのための教育の重要性が訴えられてきています。その中でも自然体験に代表されるような体験活動の充実、そのニーズが近年非常に高くなっています。また自然災害が近年増えていますが、指定災害や今流行っている新型コロナウイルスなどの非常事態、あるいは子供に目を向けてみるといじめや不登校の増加、大人でも求職者・離職者の増加、こういったように子供から大人まで心のレジリエンスというものも社会の大きな問題となっています。

このような中で、今回は早稲田大学教育学部教授の本田恵子先生、NPO 体験学習研究会代表理事の山路歩さん、NPO 法人千葉自然学校南房総市大房岬自然の家所長の神保清司さんの 3 名のゲストと共に、私たちは自然の中でどのようなアプローチができるのか、今の時代だからこそその体験活動の意味を探っていききたいと思います。



お話を頂いた後、クリティークと言うゲスト同士で代表質問をするような形をとり、その後皆様からチャットで頂いたご質問にお答えしていく時間を設けます。各プレゼンターへの質問時間は、5分、10分、20分と長くなる予定です。まずは本田先生に限定した質問。そして2人目以降は前の方のも含めての質問という風に、少しずつ時間を増やしていく予定です。ぜひチャットをご活用いただき、確認したいことや聞いてみたいことをお寄せください。それでは早速、お話しいただきましょう。

[上記①～③の順でスピーチ]

1. 本田恵子 氏（早稲田大学 教育学部 教授）



中高の教員を経験したあと、コロンビア大学大学院で特別支援教育、危機介入法などを学び、カウンセリング心理学博士号取得。不登校、学級崩壊、いじめ、非行など学校および地域で生じるさまざまな問題を包括的にとらえ、子どもたちの心身のケアに取り組む。2000年代からは、法務省の委託を受け矯正教育施設におけるアンガーマネジメントプログラムの企画実践も行っている。

私の20分では、まず今求められている体験教育に関する環境省と文科省の提言についてお話します。その後子供たちの実態。最後にSociety5.0についてお話し、今後求められていく子どもたちの自主性や自律性、また思考力の中でも特にクリエイティブシンキングが必要になってくるということをお伝えできればと思います。

..... 詳細は「別添1」をご参照ください

2. 山路歩 氏（NPO 体験学習研究会 代表理事）



アドベンチャー教育を根っこにした教育キャンプのプロデュースを続けている。JOLAではアワード審査にルーブリック評価を導入。「人が学び合う場」について考え、実践する日々を過ごす。職場のテラスでの、きりもみ式火おこしを日課にしている。日能研調査開発室。プロジェクトアドベンチャー・ジャパン非常勤ファシリテーター。JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD (JOLA) 運営委員。

私たちのキャンプはプロセスを大切にしています。

大卒のスケジューリングがある中で、子供たちのなかで起きることを大切にしながら進めています。対象はこのキャンプを始めたときから3年生、4年生に絞っています。シュタイナーの言う9歳の壁。自分と他者の境目が徐々に始まるこの時期に、意図を持ったキャンプをするということに私たちは重要性を感じています。グループを作ることで、自分がやりたいことと他者がやりたいことが違ってくる。さあ、それどうするっていうこともそうですし、様々なことが学べることになるので。

..... 詳細は「別添1」をご参照ください

3. 神保清司 氏 (NPO 法人千葉自然学校 南房総市大房岬自然の家 所長)



山形県出身。まき割り、風呂焚きがある家で育つ。青森大学大学院環境科学研究科を卒業後、ホールアース自然学校で富士山麓でのエコツアーガイド・家畜動物との里山暮らしを通じて経験を積み、2005年千葉自然学校入職。南房総市大房岬自然の家を拠点に年間18,000人の子どもたちを迎え入れながら、地域の資源を活かした持続可能な旅行商品づくりにも積極的に関わる。

今回は自然災害の中での子供たち、大人がどんな感じだったのかという報告になります。

.....

当時中学生と小学生だった娘たちは、大人が必死こいてやっている場面がワクワクしてしょうがなかった、って言うんですね。朝のミーティングなんかも混沌としているし、でもその混乱の場に一緒に子供が身を置いていて、一人工として扱うので、君がやるべきことはこれ、目標はこれ、わかった？ってそういう扱い方をしていたので達成感があったのじゃないかな。役割を与えられることの喜びみたいなものを子供たちは感じていたんじゃないかなと、僕の個人的な感想ですけど。

..... 詳細は「別添1」をご参照ください



全体会 2 「世界の環境教育実践から学ぶ」

世界の自然学校や国立公園では、どのような環境教育が行われているのでしょうか？海外のフィールド、そして日本でそのエッセンスを取り入れた実践を展開しているゲストを招き、世界の環境教育の今を感じる企画です。

ファシリテーター：

西村 仁志 氏（広島修道大学 人間環境学部 教授 / JEEF 理事）

ゲストスピーカー：

- ① レーナ・リンダル 氏（Link & Learn International 代表）
- ② トッド・ヒサイチ 氏（アメリカ国立公園局 パークレンジャー）
- ③ 萩原・ナバ・裕作 氏（岐阜県立森林文化アカデミー 准教授）

※敬称略

（西村） 清里ミーティング 1 週間、日曜日から始まりましたがどれもいよいよ最終日を迎えています。午前中は 10 分プレゼンテーション、たくさんのプレゼンをしていただきました。そして午後はこの全体会に移ってまいりたいと思います。初日の全大会 1 も非常に有意義なセッションでしたね。体験から学ぶということ、コロナの時であっても学びの体験を止めないということの大切さを思い知ったわけですが、この全体会 2 ではなんとワールドワイドでいきたいと思います。スウェーデン、アメリカのカリフォルニアそして日本代表は岐阜県からご登壇いただくことになっています。



テーマは「世界の環境教育実践から学ぶ」ですが、サブテーマはこのパネリストの方々と話し合い、「遊んで、笑って、世界を変える」としました。どんな風に遊ぶのか、それから笑顔いっぱい世界のありようを一人一人の実践から変えていこうという非常に面白い、期待のできる内容になるかと思いますので皆さん最後までお付き合いいただければと思います。

それでは、まず 3 人の登壇者の方々、カメラオン、マイクオンにさせていただいて顔を出していただけますか。

まずレーナさんご紹介します。スウェーデンからつないでいただいています。朝早くからありがとうございます。今そちら何時ですか。（レーナ：朝 5 時です。） まだ外は暗いんでしょう？（レーナ：外は真っ暗です。日が出てくるまであと 4 時間くらいかかります。） 朝 9 時台になって明るくなる感じですかね。ありがとうございます。

2 人目はトッドさん、カリフォルニアからですね。（トッド：午後 8 時です。もう暗いです。） 夜の 8 時、金曜日の夜ですね。よろしくお願いします。

そして萩原さん、そちら何時ですか？（萩原：ちょっと音声はずれていますが、12 時半くらいです。） ちょっと時差がありますよね（笑）時代も遅れているんじゃないかと思いますがね。現代の方とは思えないような感じですが。一応現代人ですね。ホモサピエンスということですね。（萩原：はい、ホモサピエンスで。） 日本語もちゃんと通じますね。（萩原：はい大丈夫です。） ありがとうございます。冗談はさておき。

今日は3人の方にそれぞれプレゼンテーションをしていただきます。どんなふうに笑顔で実践しているのかというところを順次お聞きしたいと思います。今、紹介した順に、レーナーさん、トッドさん、萩原さんの順でいきたいと思います。では一番レーナーさんお願いしてよろしいでしょうか。

1. レーナ・リンダル 氏 (Link & Learn International 代表)



スウェーデン生まれ。日本在住歴・計26年。2013年以來、スウェーデン、ウプサラ (Uppsala) 市に活動拠点を置く。1996 以来、スウェーデンと日本のつなぎ役として活躍。サステナビリティの分野で学び合いの事業を行い、多くの協力者と連帯しながら企画から実施までプロデュース。そのひとつはスウェーデンで出版された、算数の野外教育教材「野外で算数：実践ワークブック」の翻訳とスウェーデンの自然学校の活動の紹介。コロナ危機中はスウェーデンと日本を行き来する代りにデジタルな活動に転換。

スウェーデンの自然学校は日本の自然学校とかなり違うので、そのポイントを説明したいと思います。スウェーデンには自然学校が 90 校ぐらいあり、多くは自治体と深い関係があります。学校の教員が自治体職員になっているところもあるし、その自治体から予算が出ていることも多いです。そして、義務教育の学校を対象に活動しているので、必ず学校のある所、町に近いところにあります。

もちろん自然のことを教えたりしていますが、特に強調しているのは自然のことだけでなく、自然の中で他のことを教える。学校で学ぶことを教える。それは数学だったり国語だったり英語だったり技術だったり。自然学校の先生たちが、学校の先生のための指導書も作っています。

..... 詳細は「別添 1」をご参照ください

2. トッド・ヒサイチ 氏 (アメリカ国立公園局 パークレンジャー)



2004 年に市民権を取得。これまでに全米各地の 7 つの国立公園で働く。現在はカリフォルニア州の Muir Woods National Monument のインタープリターとして活躍中。全米ならびに海外から国立公園を訪れるビジターに、貴重で素晴らしい国立公園の様々な「ストーリー」を語ることにこの上ない喜びとやりがいを感じている。

私のミュアウッズでの経験、それから他のアメリカ国立公園での経験、アフリカのセネガルってところで 2 年間環境教育を行っていた時の経験を通して、個人的な見解ですけれども環境教育とはって考えたときにやっぱり、環境、自然それから地球は命があるものだと理解することが環境教育じゃないかと思っています。

地球に命があるならば、我々にも命があります。自分に命があって、他の命あるものと影響し合うわけじゃないですか。この関係性によって、良くも悪くもなる。こういう風に環境教育を考えています。

..... 詳細は「別添 1」をご参照ください

3. 萩原・ナバ・裕作 氏（岐阜県立森林文化アカデミー 准教授）



折れない心を育てるために、まずやらせてみる、自ら育とうとする衝動を大人の感覚で押さえつけないことを大切に、ドイツのロッテンブルク林業大学との連携から生まれた森林総合研究センター「morinos」、野外自主保育「森のだんごむし」などさまざまな教育実践を展開。合言葉は「心が折れるくらいなら骨が折れる方がまだましだ」。

すべての人と森をつないでいきたい、そんな繋いでいくベース、巣みたいなところを作りたいなあというふうにある日、無性に思いはじめまして、岐阜県は木の国、山の国ですからこんなにステキなリソース、森があるのにあまり人はその良さに気づいていない。勿体ない、そういうふうに思い始めました。僕の中で見てきたこと、感じたこと、こうだったらいいよね、ああだったらいいね、みたいな妄想だとか、或いは目の前で起きている課題であるとか、みんながどんなことに喜んで、どんなことを必要としていて、みたいなものを全部参考にしながら、森の中から新しい文化を作っていこうと思っています。

..... 詳細は「別添1」をご参照ください



参加者企画ワークショップ

参加者自身が企画・実施者となるワークショップを開催した。実施者でない参加者は自身の興味・目的に合わせて参加プログラムを選択し、各ワークショップで参加者同士の活発な意見交換が行われた。

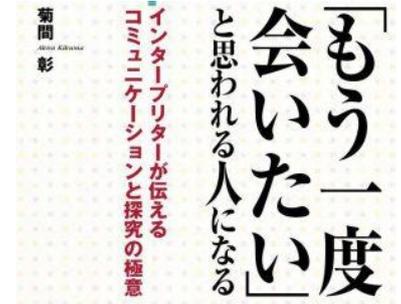
実施のあったワークショップは以下の通り。

12月8日(火)

◆インタープリテーション再入門

～インタープリターが伝えるコミュニケーションと探求の極意

インタープリテーションは、学校にも仕事にも地域活性にも応用が効く、切れ味鋭い「刀」です。新刊「もう一度会いたい」と思われる人になる～インタープリターが伝えるコミュニケーションと探求の極意（菊間彰著）を題材に、インタープリテーションという刀の「振り方」を考えます。



時間：10時00分～11時30分

定員：なし、子ども参加可（中学生以上）

実施者：菊間彰（一般社団法人をかしや）、河野宏樹（NPO 法人これからの学びネットワーク）、安修平（りょうゆう出版）

◆トヨタ山田とグリーンウッド辻が贈る！！

トヨタ白川郷自然学校×校長山田氏×環境教育×学生＝素敵な未来？

世界企業トヨタが力を入れる自然学校って、結局どこを目指して何をやってるの？ 学校長の山田さん自らが解説するプレミア企画。しかも桜美林大学「環境教育論」を学ぶ学生が、当日オンライン授業として参加。学生と共に素敵な未来を語り合いませんか。オンライン授業の実際に興味のある人にもおすすめ。NPO グリーンウッド代表の辻が軽快に進行する予定(笑)



時間：10時00分～12時30分

定員：20名、大人のみ

実施者：辻英之（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター）、山田俊行（トヨタ白川郷自然学校）

◆どうなの？ どうする？ 「プラスチックごみ」ワークショップ

この11月に発行したばかりの新教材『プラスチックごみ』を使ったワークショップです。有料化で注目を集めたレジ袋も、詰め替えの洗剤も、環境教育関係者が着ているフリースも、全部プラスチック！現状を知り、これからを考えます。



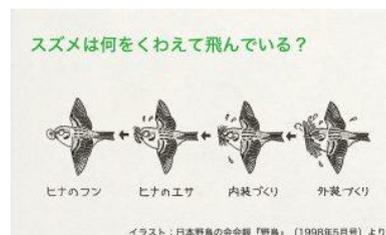
時間：14時00分～15時30分

定員：20名、子ども参加可（中学生以上）

実施者：八木亜紀子（認定 NPO 法人 開発教育協会（DEAR））

◆渡り鳥と出会い、自然を知り、文明を考える

環境教育の施設として歴史ある東京港野鳥公園を会場に、その自然環境や施設の役割、これから冬を迎える鳥たちの生き様や、人と鳥と自然のつながりなどについて、麻布大学の関根瑞希さんを聞き役として全国の参加者にオンラインで紹介します。



時 間：14時00分～15時30分

定 員：なし、子ども参加可（小学生以上）

実施者：安西英明（日本野鳥の会）、関根瑞希（CSO ラーニング 2020 年度生）、京極徹（日本環境教育フォーラム）

◆地域に大学を！～地方創生に向けた教育改革

大学は「知の拠点」として、地域における人材育成に貢献してきました。一方で、進学を機に地元を離れてしまう若者が増えていることも事実です。今回は白川村、北杜市、泰阜村から登壇者をお招きし、それぞれの地域への大学開設や大学誘致による地方創生についてお聞きします。



時 間：16時00分～17時30分

定 員：なし、大人のみ

実施者：岡島成行（青森山田学園）、諏訪哲郎（八ヶ岳 SDGs スクール）、辻英之（グリーンウッド自然体験教育センター）、山田俊行（トヨタ白川郷自然学校）

◆オンラインでもハンズオン！～GEMS 入門編

オンラインでのワークショップはつついトークベースになりやすいもの。ファシリテーションベースの GEMS（ジェムズ）プログラムでは、子どもたちの多様性を活かしながらおうちでも探究型の学びをつくることができます。

※GEMS：カリフォルニア大学バークレー校で開発された、子ども対象の体験学習プログラム



日 時：16時00分～17時30分

定 員：20名、子ども参加可（小学生以上）

実施者：鴨川光、柴原みどり（以上、ジャパン GEMS センター）

◆大人だって絵本が好き！～SDGS とつなげよう

昨年まで清里 M で SDGs × 絵本の紹介をしていました「ちえの木の实」です。今年は参加される皆さんから「お勧めの絵本」や「SDGs に繋がる絵本」を紹介していただき、おしゃべりしましょう！絵本好きの方、気軽にご参加ください。

時 間：18時30分～20時00分

定 員：20名、大人のみ

実施者：武石泉（ちえの木の实）



◆地域のビジター体験を充実させるためのガイド

／インタープリターのコンピテンシーとは

コンピテンシーとは「高い業績や成果につながる行動特性」です。日本インタープリテーション協会では、これまでインタープリターの養成や、アメリカ国立公園局との交流を行ってきました。このたび、この考えをベースにしたガイド／インタープリターの人材育成について議論しています。ワークショップではこのプロセスを共有し、みなさんからのアイデアやフィードバックを頂戴いたします。



時 間：18時30分～20時00分

定 員：40名、大人のみ

実施者：西村仁志、古瀬浩史（以上、日本インタープリテーション協会）

◆CSO ラーニング卒業生のイマ

～NPO・NGO でのインターンを通じた人材育成

SOMPO 環境財団では「木を植える人を育てたい」という思いから、大学生・大学院生を NPO・NGO へ長期インターンとして派遣する CSO ラーニング制度を 2000 年より実施しています。

様々な分野で活躍する OB・OG をお招きし、CSO ラーニング制度の経験が「イマ」にどのように活かされているのかをお聞きます。



時 間：18時30分～20時00分

定 員：なし、大人のみ

実施者：加藤超大（日本環境教育フォーラム）、清水冬音（森のようちえん虹の森）、遠矢駿一郎（環境省 鳥獣保護管理室）、串田大亮（企業 CSR/CSV 担当）

◆「複業」を始めてみよう

これからの時代は「変化を恐れず、柔軟な思考で」長い人生を有意義に過ごす責任が、個人それぞれに課されています。「複業」を切り口に生涯の仕事を自分で創るためのきっかけを探すワークショップです。



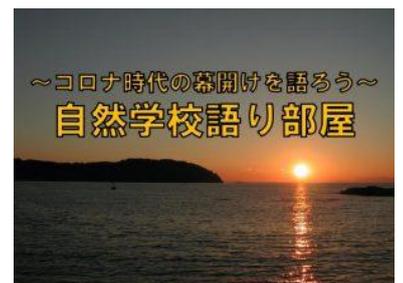
時 間：18時30分～20時00分

定 員：20名、大人のみ

実施者：芦沢壮一（スキルノート）

◆コロナ時代の幕開けを語ろう～自然学校語り部屋

生活様式、社会経済が変化するコロナ禍において、自然体験活動はどのように変化していくのでしょうか。だれも答えを持たない新しい時代に突入する悩み、不安、期待など一緒にも語らしましょう。お酒片手に気軽にご参加ください。



時 間：20時30分～22時00分

定 員：20名、大人のみ

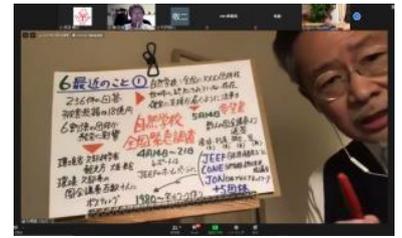
実施者：白井健（NPO 法人千葉自然学校）、遠藤隼（サシバの里自然学校）

12月9日（水）

◆伝わるオンラインプレゼンテーション！

～デジタル環境のあたらしいあたりまえ。

オンラインでのプレゼンテーション、皆さんはどんな工夫をしていますか？あるいはどんな困難に直面していますか？今回は、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）の川嶋がこのコロナ禍から生み出した伝わるオンラインプレゼンテーションの秘訣をご紹介します。皆さんでこれからの時代の選択肢を広げてみませんか？



時 間：10時00分～11時30分

定 員：なし

実施者：川嶋直（日本環境教育フォーラム）、飯島邦子（株式会社プロセスラボラトリー）

◆気候変動をさまざまな角度から見てみよう！

～SDGs・環境教育・地方公共団体の観点から

気候変動問題解決には、多様なステークホルダーが相互理解を持ちつつ解決の糸口を探すものである、と私たちは考えます。本ワークショップでは、SDGs・環境教育・地方公共団体・エネルギーなどといった多様な観点から気候変動について考えてみませんか。



時 間：14時00分～15時30分

定 員：25名、大人のみ *12/3 25名に増枠しました

実施者：福島雅之、宮下諒太、高野一輝、下戸有人（TUES 地球環境を考える会）

◆『やまねミュージアム』オンラインツアーに挑戦！

～オンラインにおける展示施設の可能性を考える

急にきたオンライン化の波に対し、展示施設のスタッフとして悩みが尽きない昨今…手探りで挑戦です！やまねミュージアムの館内ツアーを体験いただき、そのフィードバックを踏まえて画面を通した展示施設の魅力発信についてみんなで考える場とします。



時 間：14時00分～15時30分

定 員：なし、大人のみ

実施者：岩渕真奈美（公益財団法人キープ協会）

◆あつまれ！清里の森の小劇場

おうちからでも、森を楽しみたい人集まれ～！

清里の森にはどんな動物が住んでいる？どんな鳴き声？どんな気持ち…？心と体を動かして、森の動物たちを身近に感じる、表現体験ワークショップです。ミーティングのリフレッシュがてら、ぜひ気軽に遊びにいらしてください！



時 間：16時00分～17時30分

定 員：15名、子ども参加可（小学1年生以上）

実施者：村岡真梨（NPO 法人コモンビート）

◆環境教育×NVC～持続可能な未来を創る「対話」のちから

「持続可能性」という耳障りのよい言葉で「対立」を隠し、多くの声を置き去りにしたまま、強者の思惑に沿った未来が創られていく…そんな現実を変える「対話」のちからとは！？

環境教育×NVC（非暴力・共感コミュニケーション）の可能性を体験し、一緒に考えませんか？



時 間：16時00分～17時30分

定 員：30名、子ども参加可（中学生以上）

実施者：二ノ宮リムさち（東海大学）、今井麻希子（一般社団法人日本NVC研究所/株式会社 yukikazet）

◆グリーンスクール卒業生（日本人女性初）が語る「気候変動」と「環境教育」

「大学を休学しました。理由は、大学は待ってくれるけど、気候変動は待ってくれないから」 日本人女性初のグリーンスクール卒業生の露木しいなさん。若い世代（主に中高生）に伝えるために大学を休学して、日本中で講演活動を続けています。若い世代の皆さん、彼女を講演に呼ぶ可能性のある学校の先生方、必見・必聴ですよ！ なお、彼女はNPO グリーンウッドの山村留学の卒業生でもあります！



時 間：16時30分～18時30分

定 員：なし、子ども参加可（中学生以上）

実施者：露木志奈（環境活動家）、辻英之（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター）

◆馬との暮らし・自然の中で育つ、ちょっと気になる子ども達

～感覚統合×自然体験・ホースセラピー

五感は古い、七つの感覚を扱う、子ども支援で注目される「感覚統合」を紹介。三陸駒舎のホースセラピーなどの事例から、子どもの発達との関係をヒモ解き、現場で実践できる活動を考えよう。



時 間：18時30分～20時00分

定 員：15名、大人のみ

実施者：黍原豊（一般社団法人三陸駒舎）

◆「森」×「健康」～リトリートの場合での森の可能性を考える

コロナ禍のいま「自然や森の中ですごすこと」への関心が高まっています。リトリートやワーケーションなど、「健康」の切り口から捉えた「森」という場の可能性について、一緒に考えてみませんか？キープ協会の「森と健康」に関する活動のご紹介、参加者さん同士での意見交換を行います。



時 間：18時30分～20時00分

定 員：なし、大人のみ

実施者：小野明子（公益財団法人キープ協会）

◆JICA 海外協力隊カフェ～ベリーズ・ホンジュラス・キルギス編

JICA 海外協力隊では、1997年に環境教育職種の派遣がスタートしました。今回は、ベリーズ、ホンジュラス、キルギスで2年間活動してきた隊員をお招きし、途上国での環境教育や活動の様子、協力隊に参加した経緯などについてお話しいただきます。



時 間：18時30分～20時00分

定 員：なし、子ども参加可（小学生以上）

実施者：加藤超大（ヨルダン・2012年度1次隊）、木村正樹（ベリーズ・2017年度3次隊）、中込佑奈（ホンジュラス・2017年度2次隊）、広中歩（キルギス・2017年度2次隊）

◆東アジア地球市民村食堂～食事の風景から探る私たちの自然観と共通性

オンライン開催のいい所を活用して、東アジアの仲間と食事を通じてつながっちゃいましょう。食事の風景や交流から東アジアの共通点や自然観を味わおう。みなさんの環境教育などの取り組みも紹介しあおう。



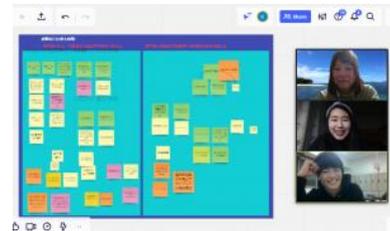
時 間：18時30分～22時00分

定 員：なし、子ども参加可

実施者：塚原俊也（くりこま高原自然学校）、朱恵文（日中市民社会ネットワーク 東アジア地球市民村）

◆ユースと語ろう！学校×環境教育のこれから

オンライン付箋ツール Miro を使ってユースと一緒にこれからの学校での環境教育について事例と意見を共有します。出前授業の経験者や、先生、未来を担うユースと様々な視点で情報共有できるワークショップです。



時 間：20時30分～22時00分

定 員：20名、大人のみ

実施者：矢動丸琴子、片山裕美子、坂浦友珠、小玉真紀、小幡成輝、三浦夕昇（以上、Change Our Next Decade）

◆美しい棚田を未来につなぐ 14年の環境教育の実践、土鍋で棚田米も炊こう

棚田はお米を育て、生き物も多く、洪水調整につながる素晴らしい環境教育の場。その場で14年間実践してきた棚田エコ学園や、自然系婚活、フェスなどについて、JOLA2017ファイナリストの永菅裕一（棚田くん）が話し、交流し、土鍋で棚田米のご飯も炊きます。



時間：16時00分～17時30分

定員：なし、大人のみ

実施者：永菅裕一（NPO 法人棚田 LOVER's）

◆プラスチックさよなら大作戦～阿部ゼミ生に力を貸してください！！

「持続可能な大学であり続けるために」そんな思いをもって始めた、学内プラスチック削減プロジェクト。しかし、現実はなかなか難しいです。

持続可能な社会にしていくためにはどうすればいいか、何ができるかについて話し合います。私たちにヒントをください！！



時間：16時00分～17時30分

定員：なし、大人のみ

実施者：阿部治、立教大学阿部治ゼミナール

◆【リレートーク】「読んでほしい」「知ってほしい」環境のこと

今の時代、様々な環境問題が指摘されています。皆さんが環境に関する身近な問題について考える・意識するきっかけとなった本や資料（絵本や漫画など堅苦しくないものも歓迎！）の中で「これは！」と思える物を持ち寄って紹介・議論しませんか。その中で弊社の環境印刷への取組もご紹介します。



時間：16時00分～17時30分

定員：15名、大人のみ

実施者：黒田信吾、今井史郎、井野口博之（以上、株式会社サンエー印刷）

◆豊かな森を造る×脱炭素×地域活性化

宮城県の鳴子温泉の地で現在進んでいる「ウエスタ・プロジェクト」は、中山間地域に豊富にある森林資源のカスケード活用が中山間地域を活性化させる重要な方法として考えた、地域とつながった事業です。皆さんと意見交換をしていきたいと考えています。



時間：18時30分～20時00分

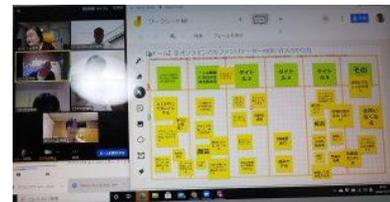
定員：20名、大人のみ

実施者：高木幹夫（日能研）、大場隆博（ウエスタ・プロジェクト）

◆は・ず・む♪アイデア出しミーティング

～3Mのチームワークソリューションを学ぼう！

コロナ禍の中、どうしても、安心・安全の対話やワークショップが出来るだろうか？ 「マスクにフェイスシールドでは、普通に対話が出来ないし、感染対策には、万全を期したい！」想いで、オンライン版にリメイクした発散から収束までの流れを体験できるワークショップです。



日 時：18時30分～20時00分

定 員：30名、子ども参加可（12歳以上）

実施者：藤丸周一郎（スリーエムジャパン株式会社）、平山猛、松木治子、櫻木正彦、杉田恵子（オンラインでPost-it®ふせんの有効活用を考えるファシリテーショングループ）

◆「エンカル・ツーリズム」の可能性～観光×「海ごみ」でまちづくり

①与論島での365日×3年間のごみ拾い、②ゴミ箱ではなく、砂浜に流れ着いた海ごみを拾うための「拾い箱」の事例+参加者との意見交換を通じて、「観光と環境の両立」、消費型ではなく貢献型の地域づくりを一緒に考えてみませんか？



日 時：18時30分～20時00分

定 員：なし、子ども参加可（中学生以上）

実施者：池田龍介（誇れるふるさとネットワーク）、辻英之（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター）

◆あなたが国の代表に！？なりきり国際環境会議！

「国際会議なんて自分からは遠すぎる…」とっていませんか？環境問題に関連する国際会議の内容、ユースの関わり方について”生物多様性”をテーマに紹介します。

その後、それぞれの国や立場になりきって、生物多様性の模擬国際会議を行います！このWSを機に、自分なりの“国際的な環境問題への関わり方”をみつけませんか？



時 間：18時30分～20時00分

定 員：20名、子ども参加可（高校生以上）

実施者：岸晃大、高原実那子、木内亨、今田海斗、中西うらら、島田ゆり子（以上、生物多様性わかものネットワーク）

◆海や自然と深くつながる。

化石燃料を使わないサスティナブルモニターツアー報告

カヌー、帆掛けサバニ、トレッキング、馬・・・化石燃料を使わずに移動するって楽しい！心地良い！これがいい！沖縄・石垣島で新たに始まるツアーの、モニター参加報告です。

100年後まで残したいものについて、一緒に考えてみませんか？



時 間：20時30分～22時00分

定 員：なし、大人のみ

実施者：八木澤潮音（ちいさな海やさん）

◆コロナ禍から先頭を切った音楽フェス「ハイレイフ八ヶ岳」開催の決断と、その感染抑制の実際を赤裸々に伝え振り返る 90分

清里で開催 4 年目を迎えたハイレイフは、コロナ禍に先頭を切る野外音楽フェスとして 3000 人を集め、NHK や新聞メディアでも大きく取り上げられました。感染抑制へ「フェスのお作法」を参加者と出演者、主催者が共につくった姿は、参加型イベントの理想を示し、写真や映像資料も豊富に残しました。大規模イベントでの環境教育の可能性を改めて考える機会としたいですね。



時 間：20時30分～22時00分

定 員：なし、大人のみ

実施者：川嶋直（日本環境教育フォーラム）、鈴木幸一（アースガーデン）、宮沢喬（VEJ）

◆ペルー×青年海外協力隊～環境教育隊員の活動ご紹介！

青年海外協力隊環境教育隊員として、ペルーに派遣された 3 人が、現地での活動内容や当時の苦労話をお話しします。また、観光地として有名なペルーの環境問題もご紹介いたします。



時 間：20時30分～22時00分

定 員：なし、子ども参加可（10歳以上）

実施者：山口泰昌（日本環境教育フォーラム）、中村俊一、浦林貴子（地球環境パートナーシッププラザ）

◆内側と外側から自分とつながる Forest タイム

森で感じる外側からの感覚、ボディワークで感じる内側からの感覚。この二つの抱き合わせによって驚くほど変化するココロとカラダ。不要なものを手放し解放してみませんか？昨年もコラボした二人が今回はオンラインで挑戦します。



時 間：20時30分～22時00分

定 員：40名、大人のみ

実施者：増田泰子（BeAct）、西尾有香音（公益財団法人キープ協会）

10分プレゼンテーション

短いプレゼンを通して他の参加者とつながるきっかけをつくる、通称「10分プレゼン」を実施した。参加者は、自身の活動を紹介して仲間を募ったり、悩みを共有してほかの参加者からアドバイスをもらったりした。

	花 (Room 1)	鳥 (Room 2)	風 (Room 3)	月 (Room 4)
	清水	鴨川	加藤	垂水
10:00	え！そうだったの?!紙芝居で伝える生物多様性のあれこれ 岸晃大(生物多様性わかものネットワーク)	日本最大級の環境フェス「アースデイ東京2021」の開催に向けて 河野竜二(アースデイ東京)	持続可能な地域づくりと国のあり方。 近藤昭一(衆議院議員)	“オンラインえんたくん”をやってみた! 飯島邦子(株)プロセスラボラトリー)
10:10				
10:15	広島修道大学人間環境学部フィールド科目の紹介 西村仁志(広島修道大学)	海辺ゼミ ~インタープリターと研究者の交流の場をつくらう 河内直子(Amamo Works)	もり・温泉・そして、こけし!? まるごと自然学校構想で目指す地域の再生 加賀浩嗣、齋藤理(鳴子環境研究会)	地域の価値とつながる、地域の価値を見つける~ワークブックで広がるピジターセンターの可能性 鳥屋尾健・関根健吾(キープ協会)
10:25				
10:30	小笠原でやってみたいことはありますか? 手塚幸恵(UMITANI+ty(ウミタニティ))	コロナ禍の中でのエコ×エネ体験プロジェクト 藤木勇光(J-POWER 電源開発(株))	社会問題を身近に自分ゴトに。現役大学生がメディアを通して発信をする理由とは? 池田奈央(立教大学コミュニティ福祉学部)	SOMPOグループのCSR 伊藤穂乃香(損害保険ジャパン(株))
10:40				
10:45	野生動物を好きになってもらう! 絵・作品の力で動物の魅力の周りへ 寺本晃太郎(岐阜大学応用生物科学部 3年)	体験の長期的影響 ヤップ島プログラムから25年間を経て、学びはどう変容したのか 高野孝子(早稲田大学/エコプラス)	SNSで繋げる「ちょっといいこと」#あしもとから 池田龍介(誇れるふるさとネットワーク)	視覚障害のアテンドと暗闇へ、聴覚障害のアテンドと声を使わない対話を ~ダイアログ・ミュージアムのご紹介 森高一(ダイアログ・ジャパン・ソサエティ)
10:55				

	花 (Room 1)	鳥 (Room 2)	風 (Room 3)	月 (Room 4)
	清水	鴨川	加藤	垂水
11:00	パソコンに潜む環境問題 大橋希 (ピープルポート株)	環境教育に出会ったきっかけと私が大切にしていること 小林伸治しんちゃん(蓼科・ハケ岳国際自然学校)	親子もらくちん！自然子育て 京村まゆみ(しまね自然子育てネットワーク)	世界一楽しくて勉強になるごみ処理場を作りたい！ 長谷川賢司(JFEエンジニアリング株)
11:10				
11:15	組織のあり方を「動植物の摂理」から学ぶ ～主催WSのコミニティを兼ねて 野口真之(埼玉県立羽生実業高校)	私たちがつくる美しい街、小倉 ～小学生によるゴミ拾いプロジェクトの報告とアクションプランの提案 みんなで生き物のくらす環境を守るプロジェクト	皆さん、私たち学生に、全国の”学べる場”を教えてください！ 山本陽菜・辻英之・他(立教大辻ゼミのイキのいい学生たち)	第2回超文化祭@オンライン～みらいをつくるソーシャルアクションフェス 白田侑子(新渡戸文化アフタースクール)
11:25				
11:30	ファンドレイジングとしてのクラウドファンディング 渡邊譲司(株ビーコン)	ウソ？ホント？日本の林業の実態とは？！ 宮本佳奈・山田佑香・江幡咲希・中島麻衣・小木曾日菜(早稲田大学高野ゼミ森林班)	グリーンウッドのオンライン見学会とは？実際と紹介 清水綾乃(グリーンウッド自然体験教育センター)	わたしたちの未来を守る！生物多様性に関わるユースの活動大紹介 矢動丸琴子(Change Our Next Decade)
11:40				
11:45	里山環境を活用した幼児向け体験型環境教育プログラムの評価 遠藤隼(サシバの里自然学校・宇都宮大学大学院衣生活環境学研究室)	「豊かに生きる」って？表現活動で楽しむ多様な価値観 花宮香織(コモンビート)	泰阜村の自然体験学童保育いってきましたの紹介！こどもたちでたき火！？はたけ！？炭焼き！？ 堀切大輔(グリーンウッド自然体験教育センター)	フィンランドで考える森とか環境とか教育とか 平井純子(University of Oulu, Finland/駿河台大学)
11:55				
12:00	『日米国立公園の姉妹協定がついに実現?! 日本みどりのプロジェクトin長野』【※録画】 北川和美(株日本旅行)	みんなのひとしずくが明るい未来をつくる ハチドリ電力【※録画】 小野悠希(株ポーダレスジャパン)	THE NOBORIGAMA ～こどもたちがイチから手がける”登り窯”焚きを生中継！～間伐材を燃料と釉薬に用いた長期スパンの環境教育 暮らしの学校「だいだらぼっち」のこどもたち	命とは？自然とは？(環境教育やSDGsの前に知っておきたいこと) 安西英明(日本野鳥の会)
12:10	Close	Close	Close	
12:15				オンラインでも紙芝居プレゼンテーション 川嶋直(日本環境教育フォーラム)
12:25				Close

その他のプログラム

加者同士の交流を促すプログラムを JEEF が企画し、実施しました。

◆情報交換会 12/6 (日) 17:30-20:00

オンラインで日本中の環境教育者をつなげる交流の場です。小部屋を自由に行き来しながら、さまざまな話題に触れることができます。さらに、自然学校や環境教育施設に就職したい(募集したい)、つながりたいという人向けのマッチングルームも開設。こんな人につながりたいとリクエストをいただければ、専門のスタッフがおつなぎいたします。

◆理事×リジ×リじ=? 12/7 日 (月) 10:30-12:00

JEEF 理事がお送りする特別セッション第 1 弾! JEEF 理事から環境教育と出会ったきっかけや今注目していること、これからの環境教育の進む道などイロイロ聞いちゃいます。参加者の皆さまからの質問も大歓迎です!!

◆長沢裕×辻英之 特別ワークショップ 12/7 (月) 13:00-15:30

JEEF 理事がお送りする特別セッション第 2 弾! 今年から JEEF 理事として仲間に加わった長沢裕さんから、これまでのキャリアや自然とともに生きるコツをお聞きします。ファシリテーターは辻英之さんが担当します。

◆市民のための環境公開講座&特別座談会 12/7 (月) 18:30-21:00

損害保険ジャパン株式会社、公益財団法人 SOMPO 環境財団、JEEF の三者共催で取り組む NGO×企業のパートナーシップ事業の先駆的な事業「市民のための環境公開講座」が開催されます。今回は「共生型未来へのパラダイムシフト」をテーマに、ソーヤー海さんを招いて循環する豊かな暮らしと社会へのパラダイムシフトについて考えます。

講座終了後には、清里ミーティングの参加者限定で、講師のソーヤー海さんを招いてのふりかえりトークセッションを開催。講座で得た気づきや疑問をすぐにぺちゃくちゃすることで、学びがより深くなります。

◆ブータンの朝 LIVE 12/10 (木) 10:00-11:30 ※ブータン時間 7:00-

幸せの国ブータンの朝の風景を LIVE 配信。首都ティンプーの丘の上に立つ寺院から景色と音を配信するだけの静かな 90 分です。穏やかにお仕事や家事をこなしたい方におすすめです。山の上から配信のため、電波が途切れる可能性もありますことを予めご了承ください。

◆自然学校 NIGHT 12/11 (金) 20:00-22:00

自然学校にかかわる人、自然学校とかかわりたい人集まれ! 現役の職員、元職員、自然学校で働きたい学生、自然学校とお仕事をしたい人、興味があればだれでも参加できます。新型コロナの影響で苦境に立たされている自然学校の今とこれからの、ざっくばらんにぶつけ合うダイアログです。

◆ふりかえり会 12/12 (土) 15:30-17:00

一週間の学びをかみ砕き、自分の中に取り込んでいくためのフリートークの時間です。少人数のブレイクアウトルームに分かれて、これからの作戦会議をしましょう!

清里ミーティングこれまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について(考え方とその論理)
②自然観察の中に今後とこんでいきたいもの
③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
④施設運営とコーディネーターの在り方について
⑤自然観察の有料化について
⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子(小池しげんの子)

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会/(財)日本環境協会
- 後援：環境庁/山梨県
- 【分科会】
前半 ①学校と環境教育 後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育 ②施設と環境教育
③施設と環境教育 ③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育 ④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育 ⑤環境教育の目的と方法
⑥学校と環境教育
⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ(元ヨセミア国立公園管理事務所長)

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会/(財)日本環境協会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
②若い世代に楽しいプログラムとは
③環境教育をうまく経営していくためには
④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
⑤環境教育で村おこしができるか
⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ(元マリン・ディスカバリーズ専務理事)

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会/(財)日本環境協会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
③プログラム ④人づくり
⑤施設 ⑥地域開発・村おこし
- ※この年4月より上記6つの研究部会が発足。
- ゲスト：ジョセフ・コーネル(ネイチャーゲーム考案者)

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：スティーブン・メドレー(ヨセミア・アソシエーション会長)

- *1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足
- *1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミア自然学校
②New School of Conservationにおける環境教育
③ペンギンリザーブ活動報告
④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
⑤フィールドミュージアムごっこ
⑥環境教育国際セミナーに参加して
⑦成城学園における「散歩」遊び
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
②エコロジーキャンプつまみぐいハイイク
③ネイチャーゲーム入門
④もしフィールドでけがをしたら
⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育
②地域に根ざした環境教育
③エコツーリズムの可能性とその問題点
④環境教育のプログラム教材開発
⑤指導者養成について
⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
③マインドクロッキー④パートナーシップへの挑戦
⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ(ストーリーテラー)

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
③森の宝箱をつくらう ④地球救出作戦
⑤枯れ木に花を咲かせよう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育 ④ネイチャー
トレイル ⑤自然学校
⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー(ミドルベリー大学英語学・環境学教授)

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり②行政・自然学校
③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
③環境教育を企画・プロデュースする
④ソフトクリーム姉ちゃんをねええ！
⑤未知なる可能性を求めて
⑥キープ・フォレスト・スクール®のプログラム体験
⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算10回)

- 日時：1996年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：174人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①自然学校の「事業化」
②自然学校でのプログラム
③地域振興と環境教育
④環境保全活動がそのまま環境教育
⑤エコツーリズムの様々な可能性
⑥JEEFの法人化など今後の可能性
- 【ワークショップ】
①ネイチャーゲーム入門講座
②ネイチャーエクスポアリング
③清里での川の環境教育を考える
④「子供であそぼう」についての御紹介
⑤元気がでる自然観察
⑥環境教育の本質を考える
⑦環境教育を企画・プロデュースする
⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
⑨自然をテーマにしたスライドショー
⑩自分への気づきとNGO
⑪清里インターネット通信社へようこそ
⑫森だくさんの自然体験
⑬まちを遊ぼう
⑭未知なる可能性を求めて
⑮エコビレッジを作ろう
⑯アクティビティの「バクリとアレンジャローカライズ」

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算11回)

- 日時：1997年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：170人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁/文部省/山梨県
- 【分科会】①環境教育の指導者養成
②環境教育の新しいプログラム開発
③環境教育とまちづくり
④環境教育の情報の発掘と提供
⑤企業や行政とどのように組むのか？
⑥新しい交流集会のスタイル
- 【WS】①ネイチャーゲーム入門講座
②自然と心・心とひとのコミュニケーション
③環境教育の服装計画を考える
④出たところ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
⑤環境教育を企画プロデュースする

- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディープエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリアングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながらり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

- ③地球と私の合作づくり「1枚の葉」
- ④見て、聴いて、感じて・・・朝の森でネイチャーゲーム
- ⑤早朝ジョギングワークショップ
- ⑥キモチときもちをつないだら

- スライドプレゼンテーション
- JEEF理事による3分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算12回)

- 日時：1998年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：176人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの
- 【ワークショップ】
 - ①環境教育個人商店を考える
 - ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
 - ③21世紀のインタープリテーションを求めて
 - ④おきらく やまんの部屋
 - ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
 - ⑥エコマネーのすすめ
 - ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
 - ⑧ネイチャーエクスポアリアング
 - ⑨エコスピリチュアルワークの試み
 - ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
 - ⑪これまでの50年とこれからの50年
 - ⑫川を設計してみよう
 - ⑬「おもい」を「かたち」はじめの一步
 - ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算13回)

- テーマ：「学ぶ心・育つ力」
- 日時：1999年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越える！
 - ⑧教育を考える
- 【早朝 WS】
 - ①カラスのきもち
 - ②朝のティータム
 - ③きもちとキモチをつないだら
 - ④五感で感じよう清里の自然
 - ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算14回)

- テーマ：「原点を見つめよう」
- 日時：2000年11月11日(土)～20日(月)
- 参加人数：171人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①野外での救急法を覚えよう
 - ②ネイチャーウォッチング in 清里
 - ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
 - ⑤竹を使ったものづくり
 - ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
 - ⑦自分という自然に出会う
 - ⑧Frog(カエル)
 - ⑨プロジェクト・アドベンチャー
- 【分科会】
 - ①自然体験活動における体験学習法
 - ②ゆったり楽しむ ノスタルジック
 - ③虫を知る・入門
 - ④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
 - ⑤学校ピオトープの可能性
 - ⑥五感を使って楽しみながら自然探検
 - ⑦環境教育とスピリチュアリティ
 - ⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
 - ⑨自然学校のPR活動を考える
 - ⑩Out of Treasure Boxes
 - ⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
 - ⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
 - ⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」
- 【早朝 WS】
 - ①野遊び手遊び発見隊
 - ②センス・オブ・ワンダーの体験

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算15回)

- 日時：2001年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：192人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／農林水産省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
 - ③秋の味覚を楽しもう！
 - ④「ほっ♪」となるたき火講座
 - ⑤身体感覚講座
 - ⑥The Bear(ひぐまの生き方、暮らし方)
 - ⑦プロジェクト・アドベンチャー
 - ⑧やまねミュージアムへ行こう
- 【分科会】
 - ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きものに関連するもの)を活用する」
 - ②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
 - ③博覧会を環境教育という視点から評価する
 - ④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
 - ⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
 - ⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
 - ⑦小さな子どもたちのための環境教育の「技」をさぐる
 - ⑧地域の昔話を中心にした環境教育
 - ⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
 - ⑩Environmental Education in English
 - ⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
 - ⑫テロ・戦争に関してわかちあう
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭GEMSの体験プログラム
 - ⑮自然学校で働くこと
 - ⑯センス・オブ・ワンダー
 - ⑰ネイチャーエクスポアリアングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
 - ⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

- 【早朝 WS】
 - ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ
 - ②早朝ジョギングワークショップ
 - スライドプレゼンテーション
 - 参加者による3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算16回)

- テーマ：「胎動」
- 日時：2002年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：182人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 環境教育ミニレクチャー
- ヨハネスブルグ・サミット報告
- 参加者による3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!!」
- 【ワークショップ】
 - ①地域通貨ってなんだろう？
 - ②折り紙を使った環境教育の試み(3)
 - ③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
 - ④環境問題、エコロジカルアートからの試み
 - ⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
 - ⑥体験主義を超えて・・・プロジェクト・ワイルドの世界
 - ⑦「自然の中で働く男性はオパチャン度が高い??」を証明したい!!
 - ⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
 - ⑨ひよこのキモチ
 - ⑩モアイは何を見たか
 - ⑪Environmental Education in English
 - ⑫持続可能な開発と環境教育
 - ⑬森の交響サイン計画づくり
 - ⑭サロンの語り場
- 【早朝 WS】
 - ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②清里ミニガイドツアーA
 - ③清里ミニガイドツアーB
 - ④モンゴル茶で朝を迎えよう
 - ⑤清里ミニガイドツアーC
- スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2003(通算17回)

- キーワード：持続可能な開発のための教育
- 日時：2003年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：208人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 【全体会】
 - ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
 - ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律

- ・持続可能な開発のための教育 (ESD)
- ・スライド&トーク ーオローニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ウラっていいとも
- ②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
- ③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
- ④総合学習への NPO 参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故?
- ⑤エコ・ネイションゲーム
- ⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
- ⑦科学するココロを育てよう!
- ⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
- ⑨野生生物教育の現状と課題
- ⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
- ⑪「持続可能な人」づくり
- ⑫開府 400 年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
- ⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
- ⑭子育てという環境
- ⑮地方発! 食農発信!
- ⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】

- ①センス・オブ・ワンダー
 - ②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース
 - ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2004(通算 18 回)

- キーワード: 「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
- 日時: 2004 年 11 月 13 日(土)~15 日(月)
- 参加人数: 187 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県
- 【全体会】
- ・「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
 - ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコワリスムという生き方
 - ②科学と環境教育
 - ③地場産小麦でパンをつくらう!
 - ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
 - ⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」
~第 1 回清里「エコ商品コンテスト」~
 - ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
 - ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
 - ⑧自然学校の動きと人材養成
 - ⑨環境教育 in 国際協力 最前線!
 - ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
 - ⑪酵母を育てて、パンを作ろう!
- ~酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり~
- ⑫石器時代に接近! モノはこうして作る ~シエラカップ~
 - ⑬いのちを伝える自然体験
~自分流健康な生きかたを学ぶ~
 - ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
 - ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
 - ⑯「1 億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

- バーム油のはなし ~開発教育入門講座~

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
 - ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 公開理事対談

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2005(通算 19 回)

- キーワード: 「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会づくりに具体的にどのよう役に立ってきたのか」
- 日時: 2005 年 11 月 19 日(土)~21 日(月)
- 参加人数: 221 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 基調講演、5 分間スピーチ、パネルディスカッション
- 【WS&体験 PRG】**
- ①環境教育基礎講座(午前の部)
 - ②自然学校って何だ?
 - ③学校教育と環境教育
 - ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
 - ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じよう
~ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら~
 - ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証 ~セルフガイドシートの評価軸を作ろう~
 - ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう!
~低学年向けの GEMS プログラムを通して~
 - ⑧森林療法
 - ⑨プロジェクト WE T 体験会(午前の部)
 - ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
 - ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
 - ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
 - ⑬CSR と環境教育
 - ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは……
 - ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法! ~過去からの環境の変化を迎える~
- ⑰プロジェクト WE T 体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育 見直そう! あなたのインタープリテーション
~持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために

- 【早朝 WS】**
- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②座禅&ヨガ
 - ③清里ミニガイドツアー

- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 活動報告

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2006(通算 20 回)

- 日時: 2006 年 11 月 18 日(土)~20 日(月)
- 参加人数: 224 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会「日本の環境教育 この 20 年を振り返る」基調講演
- 学長鼎談「大学と環境教育」

【WS&体験 PRG】

- ①自然学校を事業化する
~20 年間に自然学校は何を獲得したのか~
 - ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
 - ③あなたにとって食育ってなに?
 - ④環境教育基礎講座
 - ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
 - ⑥学びとコミュニケーション
~GEMS プログラムの体験を通して~
 - ⑦ESD の実践のポイントを探る
~みんなで話せばわかってくる!~
 - ⑧森林環境教育のすすめ ~木が好きになるプログラム~
 - ⑨50 分プレゼンテーション(午前の部)
 - ⑩企業と NPO との協働を考える戦略会議
 - ⑪環境教育と ESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
 - ⑫環境教育と地域づくり
 - ⑬環境教育仕事塾
 - ⑭行政との連携を考える
 - ⑮太鼓で太古に退行するぞ!
 - ⑯木から樹を知る方法 ~木材を IP にいかす~
 - ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくらう
 - ⑱50 分プレゼンテーション(午後の部)
 - ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方
 - ⑳感性? 科学? どっちのインタープリテーションショー
- 【早朝 WS】**
- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②環境質問 ~答えのない問題~
 - ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
 - ④清里ミニガイドツアー
 - ⑤清泉寮 朝さんぽ

- 環境ショート映像作品上映会
- 今後の戦略会議
- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2007(通算 21 回)

- 日時: 2007 年 11 月 17 日(土)~19 日(月)
- 参加人数: 230 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 省庁プレゼンテーション
- 全体会: 「生物多様性」基調講演
・第 3 次生物多様性国家戦略が目指すもの
・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
~自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法~
 - ②行政との協働を考える
 - ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ~GEMS とゴードンメソッド~
 - ④食育コミュニティをつくらう!
 - ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
 - ⑥関西発! これからは日本的でいいこう!!
 - ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
 - ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
 - ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
 - ⑩50 分プレゼンテーション
 - ⑪企業と環境 NPO との協働を進める戦略会議
 - ⑫ESD を広める人のための「ESD 入門講座」
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭生物多様性と環境教育について
 - ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
 - ⑯メディアと自然学校
 - ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
 - ⑱体験型展示物を評価しよう
 - ⑲エコワリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
 - ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
 - ㉑やってみよう!! 体感ツリークライミング⑩の世界
- 【早朝 WS】**
- ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
 - ③清里ミニガイドツアー

- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時：2008年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：192人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会：「日本型環境教育の知恵 出版記念」～日本型環境教育とは～

【ワークショップ】

- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ～どんな共生があるのか～
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境 NPO カタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコすもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ～日本の自然観という視点～
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ～行政・企業・NPOの協働～

【早朝 WS】

- ①砂鉄から鉄を作ろう! 柿崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おぼあちゃんのお家ツアー
- ③清里の森で宝物発見
- ④ロシアから渡ってきた鳥と出会しましょう
- ⑤清里ミニガイドツアー

■環境教育プレゼンテーション

- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ：「生物多様性」～環境教育の役割～
- 日時：2009年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：193人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会

- ・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGO から
- ・事例紹介「生物多様性 私はこう伝える」
- ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座
 - ②多様な生物の声を聴く～全生命の集いワークショップ～
 - ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
 - ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
 - ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
 - ⑥風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
 - ⑦パーマカルチャーと環境教育
 - ⑧幼児～小2に伝える生物多様性～生物多様性の形を探る～
 - ⑨ピジターセンターを運営側から考え創る方法
 - ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
 - ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
 - ⑫人間界に多様性は確保されているか
 - ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
 - ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
 - ⑮風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
 - ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
 - ⑱事故防止～注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
 - ⑲トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ⑦川遊びを始めよう! ～川の安全管理トレーニング～ は、都合により中止

【早朝 WS】

- ①生物多様性を映像で感じよう ～いっしょに生きる道～
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おぼあちゃんのお家ツアー
- ③ゼロからの火おこし術

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ：「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時：2010年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会

- ・基調講演「生物多様性条約第10回締約国会議の結果」
- ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
- ・提案「What is CEPA??」
- ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
- ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②日本の自然観から考える環境教育
- ③農的暮らしの学校
- ④自然感を耕す：人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥生物多様性条約の CEPA って何だ?
- ⑦企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3
- ⑨「サステナビリティ」の基本はこれだ! ※
- ⑩これだけは知っておきたい! 生物多様性の基礎知識 ※
- ⑪生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑫森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
- ⑬大学生のための食育プログラム
- ⑭命をいただく～ワトリと生きる～
- ⑮エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑯「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう!
- ⑰イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑱企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

【早朝 WS】

- ①バードコールハイク
- ②多様性を感じる観察会
- ③ゼロからの火おこし術
- ④朝飯前の手仕事
- ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
- ⑥生き方を学ぶ自然観察
- ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
- ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おぼあちゃんのお家ツアー
- ⑨みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2011(通算 25 回)

- テーマ：「これからの日本の復興に環境教育がどういった役割を果たすのか」
- 日時：2011年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：188人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/経済産業省/山梨県/日本環境教育学会

■全体会 1

- ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういった役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
- ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
- ④農的暮らしの自然学校
- ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
- ⑥里山応援ネットワークを作ろう! ワークショップ
- ⑦0から仕事を作る～体験からチームを作る～
- ⑧『ワールドカフェ～自分発! 未来をかける価値観考～』
- ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
- ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
- ⑪ESD×CSR：サステナビリティ教育指針を体感! ※
- ⑫やったらできた! エネルギー系企業と弱小 NPO のコラボ
- ⑬環境と文化・歴史・科学 etc. の複合…「旧暦」入門
- ⑭自然感を耕す 自分と里地里山山水が元気になるワーク
- ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
- ⑯PLT, WILD, WET の日本の可能性を考えよう
- ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことから始めよう～
- ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～

※の印は主催者企画ワークショップ

【早朝 WS】

- ①ゼロから始める火おこし術
- ②森林療法のプログラム体験～樹林気功と運動療法
- ③冬鳥と出会って、いのちを感じる
- ④キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2012(通算 26 回)

- テーマ：「アジアの一員として、日本が今できること ～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
- 日時：2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

- 全体会
 - ・「アジアの一員として、日本が今できること ～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
 - ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういった役割を果たすのか」

- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育入門講座
- ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
- ③実施無し
- ④プーさんの森をデザインしよう！
- ⑤考えよう！伝えよう！森の“いのち”の知恵と力
- ⑥食から考える価値と暮らし
- ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！
- ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
- ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
- ⑩「住み開き」を考えよう ～身近に環境教育の場をつくる～
- ⑪「都市と自然の融合～両方見て、初めて見える環境教育！～」
- ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
- ⑬地域に根ざすということについて PBEへの招待
- ⑭田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ
- ⑮バトニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方
- ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
- ⑰都市型環境教育 小学生向け茶外プログラム体験
- ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
- ⑲理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像
- ⑳身近な環境の総合的“明察”…内なる「マイ厩」を作ろう！
- ㉑農がXを助け、Xが農を助ける～半農半NPOでいこう～
- ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
- ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくらせよう！
- ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

- 【早朝 WS】
- ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- ②みどりともだち！泥んこ遊び de 苦玉作り
- ③キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2013(通算 27 回)

- 日時：2013年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：204人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

- 全体会
 - ・キーンノートスピーチ
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション
 - ・「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

- 【ワークショップ】
- ①自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～
- ②地域に根ざした環境教育 Place-Based-Education
- ③モミでご飯をたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり～
- ④宇宙船地球号体感インプリ：20世紀天文少年の誘い
- ⑤環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
- ⑥「原発事故のはなし3」デモとディスカッション
- ⑦質的データ分析(QDA)を体験してみよう
- ⑧企業とNGOの幸せな関係をながく続ける秘訣
- ⑨楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
- ⑩知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～
- ⑪日常の現場や暮らしに持ち帰る「運営と振り返り」
- ⑫持続可能な地域のための必要なくみを考えよう
- ⑬継承したい日本の自然観～自然体という生き方～
- ⑭事例から学ぶ ESD(持続発展教育)の基本と実践
- ⑮ゲームで生態系を学ぼう！
- ⑯ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術～
- ⑰パフォーマンス評価の世界の潮流
- ⑱15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり
- ⑲小学校で環境教育やりたい人 集まれ！
- ⑳伝える技術 KP 法(紙芝居プレゼンテーション法)

- 【早朝 WS】
- ①アイソソ彗星いつ観るか…清里、澄んだ空…今でしょ！
- ②ロシアからの旅人に会おう
- ③清里トレラン

- 【特別企画】
- ・アクアマリンふくしま移動水族館
- 【自主企画】
- ・プレゼンテーションで世界を変える！～TEDの世界～
- ・野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？
- ・スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
- ・JEEF 理事バンド(バンド演奏)
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2014(通算 28 回)

- テーマ：「ESDの10年後の環境教育」
- 日時：2014年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：186人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

- 全体会
 - ・キーンノートスピーチ
 - ・基調報告 テーマ【ESD ユネスコ世界会議を終えて】
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション【私とESD】

- 【ワークショップ】
- ①自然の中で遊ぶゲーム
- ②再び、地域に根ざした環境教育(PBE)について
- ③企業のESDのあり姿/あるべき姿を考えよう
- ④「協働」による里山再生の取り組み～○○×○○～
- ⑤エネルギー大臣になろう～ゲームで考える環境教育～
- ⑥ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術
- ⑦楽器を使ってプレゼンテーションしよう
- ⑧語ろう！考えよう！「企業のESD宣言」
- ⑨電子絵本を活用したESDプログラムを考える
- ⑩国連の新目標(SDGs)は環境教育普及につながる？
- ⑪体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ
- ⑫「自然学校と林業」環境教育は暮らしに生業に直結せよ！
- ⑬イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ
- ⑭清泉寮で自然音楽野外フェスティバルをつくる
- ⑮教育と刃物～ナイフを使う喜びを子どもたちに！
- ⑯シニア自然大学を作ろう
- ⑰自己肯定感を育むESD～これからの学びへの提案～
- ⑱GEMSの新しい使い方～森の中で 図書館の片隅で～
- ⑲KP法(紙芝居プレゼンテーション法)の工夫共有ワークショップ
- ⑳小学校で環境教育をやろう！Part II

- 【早朝 WS】
- ①朝の楽しい修行：ヨガと勤行
- ②環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②
- ③エンカウンターグループ「今ここ」
- ④清里朝散歩
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2015(通算 29 回)

- テーマ：「地域をつくる環境教育」
- 日時：2015年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：174人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 特別協力：環境省グッドライフアワード
- 全体会

- ・キーンノートスピーチ「農的生活学校の学び方」
- ・ワールドカフェ方式ディスカッション「地域をつなぐ環境教育」
- ・「世代を超えて一緒にooおう！」

- 【ワークショップ】
- ①広範囲に拡散した外来種の市民による調査と駆除対策
- ②獣害問題は、環境教育の対象になるのか。
- ③エネルギー大臣になろう！～ゲームで考える環境教育～
- ④ご当地 GEMS～地域に根ざしたアクティブ・ラーニング～
- ⑤自然学校の30年を振り返りこれからの20年を考える
- ⑥環境教育の基礎…自然とは？命とは？
- ⑦「PBE：地域に根ざした学び」を考える
- ⑧「若者が地域で生きる・暮らす」を考える3時間
- ⑨里山ってなんだらう～その意味、価値を考える～
- ⑩野生生物と共生する環境地域づくりの進め方
- ⑪持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方
- ⑫サステイナブル・ツーリズム国際基準を自然学校に！
- ⑬体感、出航！宇宙船地球丸。「天文は苦手」吹っ飛ばせ
- ⑭探そう磨こう！環境教育の魅力伝えるコトバ
- ⑮野外フェスに環境教育を広げる『NATPC FES』
- ⑯地域が蘇る“森林資源を循環させる経済”を考える
- ⑰廃校利用の自然学校の経営
- ⑱ピギナーのための自然体験型環境教育プログラム

- 【早朝 WS】
- ①朝の楽しい修行：ヨガと瞑想と歌
- ②手づくりのもみ穀コンロ、ペール缶めくくの実演！
- ③ロシアからの旅人と再会しよう～冬鳥との出会いを求めて～
- ④清里朝散歩
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2016(通算 30 回)

- テーマ：「環境教育の未来を考える！あなたの次の一歩は？」
- 日時：2016年11月5日(土)～7日(月)
- 参加人数：196人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・スライドショー「これまでの環境教育をふりかえる」
 - ・パネルディスカッション「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」

・全員参加型ディスカッション

【ワークショップ】

- ①持続可能な社会づくり、企業の役割とは
- ②持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」
- ③『エディブル・スクールヤード』をはじめよう！
- ④環境教育業界×私たち、若手の関わり方
- ⑤祝 30 周年☆清里ミーティングにまつわるコピーを作る
- ⑥自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て
- ⑦エネルギー大臣になろうワークショップ
- ⑧清里ミーティング「30+30」
- ⑨森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵
- ⑩“環境”＝“地球”を感じてみよう！天文のイロハ for 環境教育
- ⑪CEPA って何の略？地域をつくる湿地教育を考える
- ⑫森が薫る燻製づくり
- ⑬一流を学ぶ・・・第一印象と名刺交換
- ⑭「水の足跡」－スペース・ワークを使って－
- ⑮環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう
- ⑯海の森からの贈り物～海藻おしぼ～
- ⑰告知・広報に活かす”伝わる”、”伝える” 文章講座
- ⑱環境教育と家族
- ⑲アクティビティを再生する
- ⑳野外での事故に備えよう！「野外・災害救急法」の体験
- ㉑いま「公害教育」を考える
- ㉒「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！
- ㉓「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会
- ㉔SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ
- ㉕銀粘土で作る リーフモチーフの純銀アクセサリ
- ㉖幻想は捨てよう！NPO と行政のミズを埋める 8 0 分
- ㉗火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり
- ㉘マジックで環境教育に活用する
- ㉙あげよう！特定外来生物駆除活動の輪！
- ㉚持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方 2

【早朝ワークショップ】

- ①ヨーガと瞑想
- ②甲虫の玉虫でアクセサリを制作してみよう
- ③冬鳥と出会い、地球を感じよう
- ④清里朝散歩

■10 分プレゼンテーション

- ポスターセッション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2017(通算 31 回)】

- テーマ：「組織・活動を変革する 17 の視点 ～SDGs でつくる私のアクション～」
- 日時：2017 年 11 月 18 日(土)～20 日(月)
- 参加人数：137 人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、日本環境教育学会、持続可能な開発のための教育推進会議
- 全体会
 - ・パネルディスカッション「SDGs に向けて教育は何ができるか」
 - ・自分×SDGs で次のアクションを考える
 - ・全員参加型ディスカッション～SDGs でつくる私のアクション～

■ワークショップ

【対話型ワークショップ】

- ①フライング・ワイルドの体験と SDGs との繋がり
- ②SDG s ×わたし
- ③協同学習の手法で環境教育をスキルアップしよう！
- ④環境思想を考える
- ⑤生きものの魅力で心を動かしたい
- ⑥森林療法×環境教育～癒しが持つ SDGs への可能性
- ⑦つなげよう！自然体験型エコツアーズと SDGs
- ⑧CSR プログラム事例で学ぶ社会的インパクト評価
- ⑨パートナーシップでつくる「キョソト」SDGs 企画
- ⑩環境教育研究&実践から考える SDGs

【体験型 (E)・フレッシュパーソンズ (F) ワークショップ】

- ⑪持続可能な「ミライ」をつくる人材育成の在り方：F
- ⑫森林療法～調和する自己の持続可能性：F
- ⑬中止：野外活動を 120%楽しくする図鑑の読み方・使い方：F
- ⑭火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり：E
- ⑮KP 法で SDGs を整理してみよう：E
- ⑯17 の SDGs で柔軟な頭を作るゲームを：E
- ⑰アナログゲームで環境を学ぼう！：E
- ⑱「教える」より「学びあう場」を創ろう！：E
- ⑲中止：自然を使った深く自分と繋がる体験ワークショップ：F
- ⑳「うんこ」から自然を見る～教材化の面白さと可能性：F
- ㉑中止：環境ポータルサイト「BLUESHIP」の活用方法：F
- ㉒自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て：E
- ㉓既存のプログラムを SDGs ナイズ大作戦！GEMS 編：E
- ㉔SDGs と森里川海、そしてライフスタイル：E
- ㉕目からウロコ、環境教育のためのミニマム天文基礎講座：E
- ㉖公害と SDGs JEEF・あおぞら財団の協働 FW：E
- ㉗一体感を生み出す魔法の技術！アイズブレイク三連発♪：E
- ㉘音楽フェス×環境教育@清里 超実践体感ワークショップ

【早朝ワークショップ】

- ①森林療法プログラム体験～樹林気功とグラウンディング
- ②ヨーガと瞑想
- ③甲虫の玉虫でアクセサリを制作してみよう
- ④マインドフルな自然体験
- ⑤冬鳥と出会い、地球を感じよう

- ポスターセッション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2018(通算 32 回)】

- テーマ：「ESD + SDGs ～ 未来を変える教育を考える」
- 日時：2018 年 11 月 16 日(金)～18 日(日)
- 参加人数：146 人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、ESD 活動支援センター、持続可能な開発のための教育推進会議、日本環境教育学会
- 全体会
 - ・SDGs がもたらす共創の可能性
 - ・パートナーシップで未来を変える！
 - ・アイデアは地球を変える

■ワークショップ

【体験型ワークショップ・1】

- ①SDGs に果たす ESD の役割
- ②自然観察で知る生物多様性、命のあり方、人という生物
- ③学生版清里ミーティング実施に向けた作戦会議
- ④棚田米を土鍋で炊いて、味わい、お米の魅力を深める
- ⑤JOLA ～アウトドアで「未来のための人づくり」～

【対話型ワークショップ】

- ⑥SDGs for School 未来の教育デザイン
- ⑦エコヴィレッジ、災害に強いオフグリッドの居場所作り
- ⑧研修「設計」のススメ
- ⑨公害の経験から考える SDG s 達成に向けた課題
- ⑩災害支援と自然学校の役割
- ⑪美しい棚田を未来につなぐ 11 年の環境教育の実践
- ⑫ESD による地域創生の可能性
- ⑬エコ・自然塾
- ⑭野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議

【体験型ワークショップ・2】

- ⑮フルスイングの発酵ワークショップ
- ⑯読本「森里川海大好き！」を活かした環境教育へ
- ⑰森カフェ GEMS マタギさんと算数・自然の恵み山御膳
- ⑱歌の力、体感ワークショップ
- ⑲UNCO ゲーム開発のためのβ版体験ワークショップ
- ⑳教員向けエコ×エネ体験ツアーの手応えと可能性
- ㉑森で元気に！キープの「森林療法」ちょこっと体験☆
- ㉒ハラオチ納得！ジオガシキッチン教室
- ㉓「地域を活かした教育力」
- ㉔「九州・沖縄で暮らし続ける！」地域に根ざす SDGs

【早朝ワークショップ】

- ①ロシアからの旅人と再会しよう
- ②ヨーガと瞑想
- ③山珊瑚で根付を作ってみよう
- ④清里朝散歩

- ポスターセッション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2019(通算 33 回)】

- テーマ：「正解がない問いと共に生きる時代の人づくり」
- 日時：2019 年 11 月 15 日(金)～17 日(日)
- 参加人数：120 人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、ESD 活動支援センター、関東地方 ESD 活動支援センター、持続可能な開発のための教育推進会議、日本環境教育学会
- 全体会
 - ・SDGs に捉われすぎていませんか？
 - ・Learn (主体的な学び) と Unlearn (学びほぐし)

■ワークショップ

【90 分ワークショップ・1】

- ①社員を全員ファシリテーターに
- ②インタープリテーションをより効果的にする指標作成プロジェクト
- ③地球温暖化を逆転する 100 の方策ドローダウン紹介
- ④全く新しいアイデアで地球を救う本気スーパー脳嵐
- ⑤「静」のプログラムの可能性

【150 分ワークショップ】

- ⑥スマホから考える世界・わたし・SDGs
- ⑦カードゲーム“新”エネルギー大臣になろう！
- ⑧わたしたちの地域、みんなでどうする？～各地の事例から学び合おう！～
- ⑨野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議
- ⑩持続可能に海の資源を守るための取り組みを考える
- ⑪身体感覚の気づきから持続可能な社会について考えよう
- ⑫環境教育×中小企業！～パートナーシップで持続可能な事業をめざす～
- ⑬エコロジカル・シンキング カードで発想しよう！
- ⑭自然観察の基本、環境教育の基礎をおさえよう

【90 分ワークショップ・2】

- ⑮見ることに頼りすぎているかもしれない私たちへ。
- ⑯古今東西！環境教育ミーティング！
- ⑰ライブ&ダイアログ：自然の摂理を歌おう！
- ⑱ゲノム編集食品について問い合う
- ⑲林業×チームビルディングの可能性は？

【早朝ワークショップ】

- ①美しい玉虫の甲羅でアクセサリを作ってみよう。
- ②渡り鳥に出会い、季節や自然を感じよう！
- ③清里朝散歩♪
- ④ヨーガと瞑想

- ポスターセッション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

清里ミーティング 2020 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF)

〒116-0013

東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 1階

TEL : 03-5834-2897 FAX : 03-5834-2898

URL : <http://www.jeef.or.jp/>

清里ミーティング 2020 オンライン

報告書 - 別添 1.

全体会 1

全大会 2

目 次

【全体会 1】

- ① 本田恵子 氏（早稲田大学 教育学部 教授） 2
- ② 山路歩 氏（NPO 体験学習研究会 代表理事） 7
- ③ 神保清司 氏（NPO 法人千葉自然学校 南房総市大房岬自然の家 所長） 14

【全体会 2】

- ① レーナ・リンダル 氏（Link & Learn International 代表） 21
- ② トッド・ヒサイチ 氏（アメリカ国立公園局 パークレンジャー） 24
- ③ 萩原・ナバ・裕作 氏（岐阜県立森林文化アカデミー 准教授） 27
- Q & A 30

全体会1「自然遊びで育つ“たくましさ”」

- ゲストスピーカー スピーチ&ディスカッション

① 本田恵子 氏（早稲田大学 教育学部 教授）

こんにちは。本田です。よろしくお願い致します。

私の20分では、まず、今求められている体験教育に関する環境省と文科省の提言についてお話します。その後には子供たちの実態。最後に Society5.0 についてお話し、今後求められていく子どもたちの自主性や自律性、また思考力の中でも特にクリエイティブシンキングが必要になってくるということをお伝えできればと思います。

まず最初に、環境省の提言は「自ら考えて、公正に判断し、主体的に行動し、成果を導き出す」こういう人間を求めているということです。今までは知識習得、先生に言われたことをきちんと学んでいくことが評価されていたのですが、自分で考えて判断し、そして行動を決めなければいけないということになると、どういう力が必要になるのかってということになります。これを自然体験の中で学んでいければベストですね。

コミュニケーションをとることが苦手な子供が増えています。一方通行で表現はするのですが、「議論してごらん」って言うと話し合いが出来ないのです。ひたすら自分の意見を自己主張しているだけ。もっと言うと、「合意形成って何ですか？」って言う。じゃんけんで勝った方、声の大きい方が勝ちという風になってしまう。だからパワハラとか出てしまうわけです。合意をするということは、自分が意見を言い、相手の意見を聞き、そして両方が納得いくウィンウィンの結果を出さないといけないですね。そのためには、言語力だけではなく論理性も必要になるし、相手のことを共感する力も必要になってきます。

自分の考えたことを社会に生かしていくということになると、繋がりや絆が大切。

実はここが面白いんですよ。「想像してください」なんです。繋がりや絆は見えるものではないから。私は今あの人と繋がっているな。自然の中に行かなくても自然体験させてもらったあの農業体験の方たち、あの林業の方たち、今どんな事をしているのだろう？自分でイメージしてその人と共に生きるってことができるかどうか。それが協働につながる共感性なんですね。共感っていうのは相手を感じるように感じる事なのです。その状況がわかった上で皆が幸せになっていく社会って、実際にどういう社会なのでしょう。

Society5.0 については最後にお話ししますが、AIによってヘタをするとアシモフのロボット三原則が破られてしまう可能性があります。人間が機械に支配されてしまうことだって起こり得ます。

だから私たち自身が、社会の元になる道徳性とか行動規範とか、或いは皆が幸せになっていくような共感性とか、そういうものを育てていく必要がある。そのために文科省も長い間、「興味・関心、意欲の向上。課題発見力、課題解決能力。思考力を身につけよう」などと言いつけています。

豊かな人間性、価値観、体力、心身の健康。これがなければどうにもならない。実際に体験学習についていろんな規定があります。学校教育法にも入っています。特に高等学校は進路に応じて、国家とか

社会の形成に必要な資質を養いなさい、ってキャリア教育のところにもつながっています。

文科省は長期宿泊体験をしっかりと推奨しています。それも3泊4日以上です。何故でしょうか？

多くが2泊3日。なぜ3泊4日？それは“集団生活”で、3日目以上になると葛藤が起こるんですね。2泊3日だったら1日目にどこかに行き、3日目は帰りますから、正味丸1日なんです。だから何とかなってしまう。ところが3泊すると、だいたい2泊目の夜から3泊目にかけていろんなドロドロが起こります。そこで起きた対立を解消するために、自分たちで見つけていけるかどうか。

ちょっと古い資料になりますが、文科省が自然体験を推奨していくときの根拠になったもので、体験活動の多い子供たちはやはり道徳観とか正義感が強いんですね。

外に行って非日常の体験だけしてきて、“面白かったね”では体験学習の意味はありません。学んだことを学校に持ち帰って、子供たちが日常生活で生かせる、そういったプランになっていますか、ということなんです。そういうプランを先生に組んで頂きたいんですね。

決まったパターンのパッケージのまま、どこどこの宿泊行事に行きました。もう決まっています。その通りにやります。いやいや、そうじゃないでしょ！山登り、いいと思いますよ。じゃあ山登りで何を学ぶのか。どんなチーム分けにしたらいいのか。どの段階でそういうことをしていけばいいのか。子供たちの自発性や自主性を生かすためにどういうことをすればいいのか。キャンプした場合には最後には何故かキャンプファイヤーです。何のためにあるのでしょうか。あれでどんな力をつけたいのでしょうか。そういうところをしっかりと持つということになってきます。

学ぶ側が主体のプログラムを作ろうよ。それからもう一つ大事なことは、学び合いを促進するファシリテーションをしてください、なんです。

自然の中に行くと、子供たちから普段つぶやいてない言葉がいっぱい出てきますよね。そこで、担任の先生や副担の先生がその中のものをパッと拾って、こういうことを言っているよ？ねえ君はどう思う？今のことどうなの？って具合に。ファシリテーションというのは子供一人ひとりの力を促進するっていう意味。先生が引っ張って教えるのではないんです。

そして振り返りの場をしっかりと設けていただきたい。ただ行ったり、どうでした？楽しかったです。おしまい、ってことじゃない。振り返りっていうのは体験学習で一番大事なところ。やってみて、見てみて、考えてみて、そして自分がやったことを客観的に振り返る。自分は何をしたんだろう？自分は何を言ったんだろう？そういうことができるかどうかっていうことなんです。そしていろんな形で褒められていく。これがとっても大事です。では、現状はどうでしょうか？

東日本大震災が起こるまでの日本は、自然と共に生きる、そういう自然観でした。四季のあの美しい自然と共に生きていく、自然を感じていく、そういう教育だったんです。それに対して、西洋は自然に対して立ち向かっていく教育がとても多いんですね。

でも東日本大震災によって自然の脅威を感じ、自然に打ちのめされ、その後台風や長期的な雨、気候変動など、どうやって一緒に生きていけばいいのかっていう状況に子どもたちは今ぶち当たっています。

そして、今年のコロナですね。目に見えない脅威がどんどん進行してくると、触れ合って遊べない。触っちゃいけないんですよ。いろいろやりたい。でも手はいつも洗ってなきゃいけない。旅行すらバーチャルになっていますよね。こういう世界の中で子どもたちの自然な環境、自然な心をどうやって育てればいいのか。

文科省の調査によると、暴力が増加しています。小学校低学年の不登校が増加しています。18万人で

す。もう、前代未聞ですね。そして児童虐待とか親子関係での入所施設、満杯状態です。乳児院には0歳が入っている。児童養護施設も2歳から入れます。心を病んで学校に行けず、養護施設でも預かれない12歳の子が心理治療施設に山ほど入っています。養護施設を出た後、家に帰れず、居場所のない子供も増えている。児童自立支援施設は非行とか犯罪傾向が進んでしまった子供たちが行きます。少年院一歩手前です。本来は少年院に行くべき子だけど、歳が幼いからという理由で入る場合もあります。最後が自立援助ホームって言うんです。

不登校の子供は一気に中1で増えますが、小学校4年生ぐらいからぐんぐん上がるんです。中学の3年間全く学校に行かなくても義務教育ですから卒業証書もらえます。だから3年間遊ぼうぜっていう子供たちもずいぶん増えています。高校生も、今はコロナで学校に行かなくてもいいってことになってしまっている学校もありますから、すごく不登校が増えています。

ではその理由は？小学生は無気力で、人間関係に悩んでいる。もちろん学業の悩みもあります。高校生は生活リズムが崩れて、昼夜逆転という状態。

一方で、真面目に学校に行って真面目に授業を受けて真面目に提出物を出している子供はというと、これも力ついていないんです。これ、東京都の31年度の学力です。教科書の例題レベルすら出来ない子供たちがいるわけです。算数が一番厳しいですね。到達できている子が小学校9.6%しかいません。考える力。理科でまとめていく力も同じくです。

こうなると、さあどうしよう、ってことになるんですね。

これから求められる Society5.0。どういう力かということ、4.0の段階ってというのはクラウドを使っている状況です。自分たちが作ったものを、クラウド上に置いて、どこに行ってもアクセスできるようにしている状態までです。5.0はビッグデータがいろんなことをやってくれる。自分がアクセスしたらすべて出してくれちゃうんです。あなたにとって必要なものはこれよって、決めてくれちゃうんです。ある意味楽ですね。勉強こんなことしました。つまずきました。あなたはこんな勉強するといいですよ。とっても楽です。でも考えません。お任せ状態です。全部コンピューターが考えてくれるから、余計に考えなくなってしまうんですね。となると、この5.0に支配されないように、自分自身がきちっとその社会の中でクリエイティブな世の中をつくっていくためには何が必要か。ここなんです。

高度専門職に必要な知識と能力ってものを身につけていくためには何が必要になるか、ということそれは基本の素質。基礎学力です。さらには、様々なものに対する興味関心。

文科省も言っていました。外国語や倫理、データ分析とかいろいろなものに興味関心を持って知識を増やしていく。これが小学校・中学校なんです。そして高校になったら、規範的な判断力と論理的思考力、これを使いながら文科省や環境省の言っている、問題を自分で見つけて、例えば世の中の問題って何だろう、コロナの中で教育をやっていくってどういうことなんだろう、と想像するわけです。

教室の中で距離が離れている。でもあの子と繋がっていると感じるためには、どんなディスカッションをしたらいいのだろう。どんな話し合いの場が設けられるのだろう。文化祭、運動会、いろんな形で新しい構想を練っていく必要がありますね。そのためにどんな設計があればいいのか。

企画力ですね。いっぱい情報があるのですから、情報を集めて、それを自分たちで組み立てて提案していったら一気に広めてくれます。そこがこれからのところなんです。

それでは私が日常的にやっている事例を紹介します。司会の鴨川さんもリーダーになってくださっている「あそぼう会」という、小学校1年生から3年生までの子供たちが、月1回ゲームとかは一切やら

ないで、自然に行こう！自然のものを使って遊ぼう！というものです。大学生たちが引率に来てくれるので、今回はこういうのでいこうよっていうテーマが決まったら、共感性だとかそれこそ対立解消だとか協力だとかね、4月だったら仲間入りだからみんなに仲間に呼び込むっていうのをやろう。じゃあどこに行ったら呼び込むということができるかな、なんていうので遊び場を決めて、そこでいろんなことを考えます。「あそぼう会」を卒業して高校生になったジュニアリーダーたちも来てくれて、自分たちの体験を伝えていく。

自然体験ですから泥んこになるのが当たり前です。親御さんには、喧嘩します、怪我して帰って来ますって言ってあります。でもその中で、ちゃんと話し合いをして、解決まで持っていくますから、と伝えます。月曜から金曜まですごいストレスを抱えた子供たちが土曜日とか日曜日の朝に集まって、その時にはギスギスしているのですが、外に行って自然に触れて、転がっているうちにどんどん顔が変わってきて、もう帰るときにはほっこりした状態になっています。

問題提起としては、このあたりで終わらせていただきます。

(鴨川) 本田先生、ありがとうございます。Society5.0の前から生きてきた人間が5.0に進むのと、5.0の時代に生まれてきた子供たちとでは当然変わってくるので、これからどういう体験活動とか学びをつくっていくかというのはすごく大事なんだなあと改めて感じました。

では皆様、これからQ&Aの時間を取りますのでチャットに質問をご入力ください。

その間に、神保さんから本田先生に！

(神保) 具体的な事例として、今学校では火や刃物を異常に遠ざけるのですが、都会だけでなく田舎でもそういう風潮ってすごく強まっているなあと感じています。ここ10年ぐらい。どう思われますか？

(本田) 危険なものを安全に扱うっていう力は、生きていく上で必要ですよ。怪我させない方にばかりいっちゃうとその危ないものを正しく扱えない。まず正しい扱い方を教えてからの方がいいかな。正しいことしないで勝手に実験させていますよね。それで危ないことになって怪我をしたら、もう一切ダメになってしまう。ただね、指の感覚統合と言うのですか、悪い子がすごく多いです。私たち、ナイフで削っていたじゃないですか。今の子は、指削りますから。だから持たせられないですよ。包丁とかも小っちゃい頃からやっていないので、危なっかしくて持たせられないだろうな。

だから学校に通う前に、お家の中で色んな体験をしていくといいかなと思うんですけど、大体2歳ぐらいから子供たちは刃物に興味を持って触りたがりますよね。そこで触らせてもらえるかどうか。火遊びもまずお家でやりますよね、花火で。

(鴨川) 質問来ました。

ジュニアリーダー、これ遊ぼう会ですね。高校生はどのように育てたのですか。このプログラムのスタートのときは小学生だったということでしょうか、という質問です。

(本田) そうです。ジュニアリーダーはだいたい自分が小中に行って終わりなの？まだ来たい！そういう人が多いです。高校生から入る子も勿論います。子供が好きで将来先生になりたいとか、やりたいことなくて暇なんだよねーなんていう子を引っ張り出してくるとかね。育てるっていうのは一緒に体験しながら我々がそばで今ここ入りなさい、とか今こっちはよとか、そういうので大学生たちがジュニアリーダーを育てながらやっています。

(山路) がつつり、振り返りとかしてそうですね。

(鴨川) していますね。一日の流れの中にも明確に振り返りの時間が30分ぐらい取られている。

(本田) 子供たちと振り返りをし、終わった後にはリーダーだけ集めて振り返りをするので、この1~2時間がね、とっても色濃いです。

(鴨川) コロナ禍での触れあいの具体的な方法に悩んでいる。教えてほしいという質問が来ています。

(本田) 今年は鴨川さん中心に学生たちが頑張ってくれました。ZOOMを使わせていただきました。オンラインでやろうということで、毎週テーマを決めて、みんなで何か作ろう！うどん作っちゃえー！とか。レシピこれねー、はい、やるよーとかって。今月はロールサンドでしたっけ？

(鴨川) ロールサンドです。

(本田) 何か作ろうってことで、身近なもの、例えば木の実とか集めてきたところで、じゃあ工作するお部屋はこっちとか。この間はマスクを作るお部屋も作りました。動物になろう、とかいろんなもの、葉っぱつけてやるとかね。そんなことをやったり。自分の近くで集められるものでやっていたので、今年に関しては全国で遊ぼう会ができましたよ。

(鴨川) 遊ぼう会についての質問がたくさん来ているので、チャットに「遊ぼう会」のURLを貼らせていただきました。こちらは是非ご参照ください。

(本田) 素質を育成するのに学校と家庭の役割。

学校に求めるものが多すぎるかなって思います。まずは家庭教育なんですよ。幼児教育、私はすごく大切にしてもらいたいと思っている。感性が育っていくのってやっぱり3歳から5歳なんですよ。友達関係の基礎というのもそこになります。保育園とか幼稚園とかでたっぷり自然に触れあえる教育っていうのも大事なかなと。泥んこ遊びとか怖がらないでどんどんやればいい。畑とかね。虫とか触るのを。葉っぱがあるよ、何かがあるよ、かたつむりだよ！そうだね、カタツムリどこにくっついてた？ってね。

また、野の花絵本とか自然の散歩絵本とか日常のそういうのもあるんですよ。そんなのを使いながら家庭教育の中で今日保育園でこんな見たよって言ったらこれだねーって言って、そういったところも連携しながら家庭教育と保育園とか幼稚園とかができるといいなと思います。

(鴨川) 大きい自然に目が行きがちですが、身の周りにもたくさんの自然があるんですよね。家庭教育に自信がないような親御さんにも自然体験を届けたいのですが、何かアドバイスありますでしょうか、という質問が来ています。

(本田) そうですね。お金かからないでやるのが一番となると、やっぱり近所の公園なんです。私たちが連れて行くのも近所の公園です。室内だけじゃなくて、ちょっと外に行こうよってね。

(鴨川) ありがとうございます。では第1弾の Q&A はここまでにしましょう。

具体的な実践についての質問もありましたので、この後お二人の話がそこを語ってくれるでしょう。それでは山路さん、次、宜しくお願いします。

② 山路歩 氏 (NPO 体験学習研究会 代表理事)

体験学習研究会の山路と申します。よろしく申し上げます。

私は本田先生に学生時代教えていただきまして、その時、本田先生が常に授業のスタートで言う言葉があって、それは何かというと「今ここで何起きている？」と聞かれるんですね。そこで起きていることをみんなでワイワイやるのですが、今はキャンプをやっていますけども、実はそれと一緒に、今そこで子どもたちに起きていることを見て観察して、子供たちにとってより良い方向に行くように介入し続けるということを、キャンプを通じてやっているのだと本田先生の話聞きながら確認しました。

早速ですが、私の話進めます。こんなところでキャンプをしています。今年もやりました。

実は今年の8月にもキャンプをやりましたが、その前の3月、小池さんがちょうどロックダウンという言葉を出し始めた時に、スノーキャンプという形でこの写真にあります福島県裏磐梯小野川湖というところなんですけど、この地でキャンプをしました。そのキャンプの舞台を今日はお話しさせていただこうかなあと考えています。

簡単に自己紹介します。私は首都圏中心にある中学受験の学習塾の日能研の社員です。その中で新卒の研修に関わっていたり、社会科の授業を担当していました。日能研で働いて20年経つのですが、3年目ぐらいからNPO 法人体験学習研究会、日能研が作ったNPO 法人に異動して、キャンプの企画運営をやっています。この仕事がどんどん派生して、いろんな方とつながっていったら今は私立の中高の研修に関わったりとか、私立の中学高校の教員の方の研修に関わったりなど、そんなことを仕事にしています。

あと2つ、2005年からプロジェクトアドベンチャー日本の非常勤ファシリテーターをやっています。もう一つは、JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD 運営委員です。詳しい事が聞きたい方は個人的につながっていただけて質問していただければと思います。よろしく申し上げます。

今日私がお話しするのは、この赤字のところにある日能研キャンプの企画運営です。ですので、まず簡単に日能研の説明を。日能研は小学生のための中学受験塾です。高校受験はやっていません。大学受

験もやっていません。小学生のために存在している学習塾です。企業という言い方は、僕らはこだわってしないのですが、私立中高一貫校の啓蒙のために、ここに進みゆく子どもたちのための学びの場としてできた会社です。受験産業ですので、希望の中学校に入らせていただくことが大事なのですが、ただ受験に受ければいいよねっていうことではなく、私たちが大切にしているのは、その先に進んだ6年間のための学力や生きていく上で大切なことっていうのをしっかり小学生のうちに学んでほしいよね、そういう機会を作りたいよね、じゃあ仕事として何ができる？そんなことを考えています。

ですので、塾としてはちょっと特殊ですが、アドベンチャー教育の考え方「プロジェクトアドベンチャー」というのを入れています。

体験学習法ってありますが、多分日本中どこを探してもこのような塾はないと思います。各教室の各部屋にコルブの体験学習サイクルのポスターが貼ってあります。これは4年生から6年生まで、自らを振り返り、自分で自分を育てていく、ということを中心にしながら進めていきます。GEMSも大切にしています。先ほど少し話したループリックは、職員自身も子供たちも自己評価で、自分で自分を育てていく、これは振り返りにも繋がっていきます。

こういった事をやっている日能研なので、キャンプでもいろいろなこだわりがあるんですよ。

キャンプをやる中で大切にしていることが、一つは振り返るということです。自分自身の中に何が起きていて、何故そういうことが起きたのか、とか自分が当たり前になっているその前提になるものって何だろうか、なんてことを考えたり、言葉にしたり、互いに話し合うという機会をふんだんに入れています。

そして、それを促進させるものがグループ作りです。こういうグループになってね、っていうゴールはありません。そこに集まったメンバーがどういうグループをつくりたいのって話す中で、それをまた振り返ってという具合に。左の写真、男の子同士が話しているのですが、グループを作るということをテーマにキャンプを進めていくと、必ず起きるのが対立・葛藤・もめごとですね。

この写真は戸隠ガールスカウトとのコラボレーションで実施したキャンプですが、戸隠山の麓のガールスカウトセンターで男の子2人がケンカをして話をしています。実はこのグループ、大人を含めて8人いるんですけども、この2人があえてこの対立は2人でやり取りをさせてほしいということで、写真を撮っている僕の横に他のグループメンバーと一緒にこの2人を見つめているシーンです。このあと、2人で踏ん切りをつけて、できたよ、解決できたよ、ってなりました。

右の写真は、小野川湖のキャンプです。どちらの道に行くかっていうことでもめ始めたのですが、結局そこからグループメンバーも巻き込んで、男の子が言ったのは、ここまで自分の意見がなんか大切にされてない気がする話をしだしてから、あーそれもうグループの問題ねってみんな話し始めた。そんなシーンです。

先ほどの本田先生の話につながるのですが、やはり長期キャンプが大事だよってということで最低3泊以上、できれば4泊5泊、そういうことをしています。

今年の夏、コロナ禍でもキャンプを行いました。今年の夏は2会場予定し、どちらのキャンプも30名規模の企画です。一つは福島県の裏磐梯会場、もう一つは岩手県の山形村会場です。実はこの2つ、ビックリだったんですが、5月末に応募を開始し2時間ですべて満席になりました。保護者の方と話すとき、リスクゼロにできないのは承知です、と。それでも子供にとって必要なことなのでキャンプはしてほしいという言葉がたくさんいただいて、あとは世の中の流れと保護者の思い・気持ちの中でキャンプをし

続けているといった感じです。

しかしながら 2 つの会場のうち岩手県の山形村会場は開催の 1 週間前に役所からやはりダメだという連絡がきました。その時まだ岩手県が感染者ゼロだったんですね。色んな文脈があって開催できなかったです。福島県の裏磐梯会場は開催しました。

保護者会は対面でやることにしました。キャンプでお子さまをお預かりするので、しっかり関係をつくっておきたい。ですので、保護者の方もぜひ対面でお会いしましょうということで、環境も整えて行いました。やはり当日リスクを考えて対面を拒む保護者もいらっしゃったので、その方々には動画配信をしました。当日までの健康維持はもちろんですが、予防以上に飛沫コントロールを考えてキャンプを進めると保護者には伝えました。

つまり自分自身が感染しているかもしれないと思って、それを他者に渡さない。そのために出来ることを考えようっていうことをキャンプの中にも取り入れていくと。マスクはもちろん、どういう行動がどうなると他者にどう影響があるのか、そんな事を考えながらキャンプをしていこうね、という形で進めました。

私たちのキャンプはプロセスを大切にしています。子供たちが色々活動していくうえで、この日は何やる、何やるっていう大枠はプロスタッフで作っていますが、子供たちに起こることってそれぞれもうバラバラなんですね。なので、その子供たちの中で起きることをベースにキャンプをしていくということになります。

例えば一昨年の実例を 1 つ、今日は鍾乳洞に行こうってなっても、子供たちの中で行くか行かないかみたいな話になって、スタッフはそれにとことん付き合います。結局 1 つのグループは話し合って、ぶつかって、鍾乳洞に行かなかったのです。もう 1 つのグループは鍾乳洞に行こう！レッツゴー！って行って帰って来て、振り返りをします。では、鍾乳洞に行かなかったグループはそれで満足じゃないのかというと、そうではなく、すごく僕たちのグループ進んだねっていうようなやりとりをしていて、すごくいい感じになっていました。

このように、大枠のスケジューリングがある中で子供たちのなかで起きることを大切にしながら進めています。対象はこのキャンプを始めたときから 3 年生、4 年生に絞っています。シュタイナーの言う 9 歳の壁。自分と他者の境目が徐々に始まるこの時期に、意図を持ったキャンプをするということに私たちは重要性を感じています。グループを作ることで、自分がやりたいことと他者がやりたいことが違ってくる。さあ、それどうするっていうこともそうですし、様々なことが学べることになるのでそんな感じでやっています。

大切なテーマは共同体感覚と自己決定、この 2 つです。

共同体感覚は、アドラー心理学から言葉ももらってちょっと言葉を変えてね、自分を大切にする、相手を大切にする、みんなを大切にする、これが同時に出来ていれば僕たちは自由だよっていうことをグラドルールで渡します。これ以外の事はもう何しちやいけないとか、そういうルールは渡さないから、これだけは僕らのグラドルールね、って子供たちに渡しています。

こういう答えのないグラドルールをキャンプで使うことってすごく大事だと思います。同時なので、あとで僕のことを大切にしてくれればいいから今はまあいいやとか、そういうのは無しなんです。今この中でそれがどうだったのかということもみんなでやり取りしながら進んでいきます。

子供だって失敗するし、大人だって失敗する。様々なことが起きます。印象的だったのはカレーライ

スの調理の時に、1人の子は良かれと思って包丁をとって、私がこうやったらこうだよって見せたんですけども、もう1人の子にとっては自分のチャレンジの場が減ったて感じたらしく、振り返りの時にもうちょっと俺を信用して包丁を使わせて欲しかったんだよね、ってやりとりをゲラゲラ笑いながらして。包丁とった方の子は、あーそっか、それは同時にできてなかったってことなんだね、みたいなやり取りをしていました。

あとは自己決定。自分で決めようということをキャンプの中で伝えていきます。

自分で決めるって事を豊かにするキャンプをしたい。そこで注意しているのが、自己決定と責任をセットにしないということです。これはお前が決めたのだから、責任あるんだから、なんて重たい物を渡すのではなく、責任をセットにしないということをキャンプ中はスタッフも含めて注意しています。

コロナ禍での今年のキャンプは、学べることがたくさんありました。

食事のガイドラインは、全員マイトングで、あえて大皿形式にしました。自分の手を消毒してマイトングを持って、取りに行くときには喋らず取る。食事の時に話さないのはつまらないので、美味しく食べるということと話して仲良くなるということが両立できたらいいなって思っていました。子供たちはそれを敏感にとらえ、飛沫コントロールについてすごく工夫していました。テーブルに紙ナプキンを置いて、話すときは手にこう添えて話してみようとか、飛沫コントロールを意識しながら食事の時間を作る。しゃべって仲良くしようみたいなことはなかなかうまくいかないね、なんて言いながらやっていました。子供たちの振り返りに、この食事の時間に考えたのが楽しかったというのがあったんですね。ああ、これは良かったなあと思っています。学校では、食事の時間は食べるだけに集中して話さない、となっているようで、話すためにどうしようとか、飛沫コントロールを考えるということすごく頭を使ったとの振り返りがありました。

宿泊については、テント泊は難しいのでシェルター泊にしました。これは10月にあった大人の日能研のキャンプですが、シェルター泊、さらにソロビバークということも例年あまりやらないんですけどやりました。この中では9名の方が寝ていますが、こんな感じです。

あとはもうひたすらアクティビティもしくは外で遊んで、自分たちのグループのことを話すというようなことで時間を作っていました。

改めて対面式のキャンプ、続けなきゃなあとは考えています。もうちょっと1週間ぐらいのキャンプ、長いキャンプも必要なのではないかな。解放を作るために何ができるか、など考えています。どんどん新しい生活様式でこうするんだよ、と学校や様々なところで指示されているから、キャンプやる時にはそれが悪いということではなく、その当たり前って本当？前提って何にあると思う？といったやり取りをしていくようなキャンプが必要になるなあと考えています。喋らないって言う当たり前はどういう前提のもとにあるの？とか、そんなことを一緒に子供たちと考えていくキャンプをしたいな、と。

そもそも子どもたちはノーノーマルと書きましたが、大人ほど過去に生きていないです。過去ああったなあとかないです。今を一生懸命生きているので、今こういうことが大事だよ、今これを考えようってなったなら、そこに一緒に進んでいけます。ただし、その当たり前が正しいとも限らないので、今の僕たちのすでになり始めている当たり前って本当に大丈夫ってということをお互いに確認し合うことが必要だなあと考えることが大切です。

これは私の野望なんですけれども、いろんな子供たちが今キャンプに来始めているので、こんなことが大事だなあと考えています。一つはブリーフィング。僕らPA系のファシリテーターはインストラクシ

ョンっていうブリーフィングという言い方をすると思うんですけども、僕はどちらかというときっちり何をするのかわかりやすいブリーフィングより、子どもたちの心が動く、もやもやしていく、なんか心が動いてでもなんかちょっとモヤモヤする、みたいなそんなブリーフィングが大事なんじゃないかなと思っていて、それとユーモアですよ。みんなの脳みそがぐるぐる動き始めるためのやっぱりブリーフィング、言葉もそうですし、体感覚もそうですし、いろいろな工夫をして今何でこれをやるのか、どうやってこれを使っていこうか、みたいな話を丁寧にしていくキャンプを益々していきたいです。

そして、もう一つは介入です。ここに図を書きましたが課題達成のプロセスに目を向けるのか、個人なのかグループのやりとりなのか。みんな大事なプロセスなのですが、私たちはよりこの関係のところのプロセスにしっかりアプローチできる観察をしていきたいと考えています。グループと一緒にいるカウンセラーもこの課題達成のプロセスにどんどん没頭していくんですよ。関係が見えてこないとか個人に何が起きているか見えなくなるので、そこを先ほどの組織図の周りにはプロスタッフのファシリテーターが助けて介入していく、そんな感じです。ホリスティックアプローチ。部分を全体化しない。一部だけ見てこの子はこういう子だよ、このグループはこういうグループだよってついついやってしまうので、そのホリスティック、包括的に見る目っていうことを大事にしていきたいです。

そして、歌い続けます。はい。歌には力があると思っています。歌を歌うことでいろんな子供たちの様子も見えてくるので。体感覚、体を動かすのが嫌な子も、例えばこの歌の中に2枚の羽ってあるけども、この2枚の羽ってこのキャンプでいうと何に例えられると思う？みたいな言語に言語を使った問いかけをすると急に乗ってくる子とかもいますよね。だから歌を歌うだけじゃなくてその歌の力、メタファー、メッセージを使ってキャンプを作っていこうかなあと考えています。

これらは一つの考え方のもとにある私達のキャンプですので、これからも続けていきたいなと思います。仲間もすぐく欲しいので、この話を聞いてちょっと関わってみたいという方はぜひご連絡ください。一緒にできる方を探しています。よろしくお願ひします。

(鴨川) いろいろな実践が出てきましたが、本田先生からお願いします。

(本田) コロナ対応の食事のガイドラインを教えてください。飛沫コントロールとか距離の取り方など。

(山路) 先ほどは話さなかったのですが、食事に関していうと私たちは自炊をしないキャンプなんです。調理師、プロスタッフ調理師を呼んで、基本食事を提供するという形にしています。それを大皿に出してもらおうという形ですね。例えばデザートとかヨーグルトとかっていうのは全部個別に提供するというにしましたが、大皿料理に関してはやっぱり教育的効果で、あるものをみんなの全体を考えて取っていくっていうことは残したかったんです。ですので、それをしつつ、でもコロナのことを考えるとマイトングを使うということにしました。一回一回手を消毒して、自分のマイトングを持って行って、マスクをして喋らずに取って、また戻って自分のトングを片付けて、まあ、こういう感じでカップに入れるんですけども、大皿料理の提供はできました。あと、細かいこといくらでもあるんですが、キャンプってこの一度出したものが、姿を変えて違うものを出すみたいなことっていうのは長期キャンプをして

いくとあるんですね。残ったものを別の料理にして出すと思うんですけども、基本火を通す。加熱調理できないものの繰り越しは一切無しとしました。こういうことをしながら衛生面はその調理師の方にお任せしながらキャンプを進めていきました。

(鴨川) なるほど。やっぱりリスクがね、ゼロにならないということをしかりと説明されたというところ、皆さんいいなあと思ってらっしゃるみたいです。保護者の方に具体的にどういう言葉でお伝えしたのですか?という質問がきています。

(山路) いやもうそのままですよ。出来ることをやりますけど、リスクゼロは無理です、と。でも5月6月ぐらいの情報で、私たちはこう判断したんですよ。ちょっと話が変わっちゃうかもしれないですけども、すごく考えたのはリスクがゼロにならないにしても飛沫コントロールしよう。で、マスクをどうするのかという話で、いろんな自然学校のメンバーと話をしたんです。基本的にずっとマスクしていました。山登るときもマスク、不織布のマスクを主にして、ぐちゃぐちゃになったら、はい、もう変えようっていうくらいな感じで、全スタッフ、箱のマスク持って、渡すみたいな形にしました。こういう形でキャンプやっていきますってことは保護者にも言いましたし、ちょっとつまんなくなっちゃうかもしれないですけどごめんなさい、みたいなやり取りは保護者として、まあそれはしょうがないですよっていう話しになりましたね。

ただ同時に教育キャンプやっている他団体があったので、そこがすごく難しく、生活のところがキャンプ場って基本外なので、マスク無しでいこうと思いますという団体もあって、じゃあそこは間をおいてちょっと話しましょうとか。でも共有スペースもあるので、そういう時に会った時お互いこういうことを大事にしましょうねとか、そういうようなやり取りをしました。保護者の方にはそこまで細かく言っておらず、他団体もいるのですが丁寧にやりとりをします、くらいだったんです。

終わってみると、もう少し細かく詰めたほうが良かったなあと思うところはあります。

(鴨川) またそれも体験学習サイクルに回っていくんですね。そして調理について、自炊をしないのはどういう意味があるのでしょうか、狙いを教えてくださいと質問来ています。

(山路) そうですね。してもいいんです。ただ、時間のバランスで考えた時に調理って始めると朝夕晩ってその前後ですごく時間を取ることになるので、それよりは対話の時間を増やしたいというシンプルな理由です。

調理師に任せて大皿にすることで、10人の子供がいて、20個唐揚げ出したらいろんなドラマが起きるじゃないですか。そういう教育効果を大切にしています。絶対いるんですよ、唐揚げ3つ位取って、私1個しかないじゃん、っていう揉め事。でもそれすごく大事な時間だと思っていて、それをみんなでじゃあどうするっていうことを話し合ったり、次どう生かすってことを考えることをキャンプで大切にしているので、そう、あえて今自炊行わないキャンプしています。

(本田) お話を聞いていると、キャンプの中でトラブルや対立が自然に起こるわけですよ。一般的な生活の中って、これを起こしていないんですよ。幼稚園で2人が揉めていたら、先生が玩具を1つずつ

与えて、とにかくケガをさせないとか危険なことをさせないって、こうなっている。揉めるっていうことが日常生活に非常に少ない。兄弟喧嘩の時に親御さんがすぐに間に入って止めちゃう。しっかり喧嘩して最後までやるっていうね、どうやったら喧嘩が起こって、どうやったら話し合いになって、最後どうやったら決着するのかって、この一連の流れを体験していない子供たちが多い。いじめって一方通行じゃないですか。それがちゃんと両方から揉めているよね、話し合いでも揉めているよね。さっきの食事でも取り合いになっているよね。そういう場面で具体的にどんなふうに子供たちをファシリテーションして解決まで導いているのか。何か具体例があったら教えていただきたい。

(山路) 先生の話聞いて思ったのは、解決っていうのはしていないケースが多いかもしれない。ただ僕らのスタッフもやっぱりみんな能動的に聞くことや親行みたいなのトレーニングを受けているメンバーが多いので、「まあ待て」と止めて、どうしたかったんだよね、どうだったんだねっていうことを引き出すことはしています。どんどんどんどんまあ広がりますよね。それがお互いに納得ってならない時もすごくたくさんあって、でもなんかちょっとすっきりしたみたいな。言いたいことは言った、でどうするの？2人共どうするの？って言ったら、んー、まあいっかなーみたいな時もあるし、お互いにももちろん、ごめんね、ごめんねーみたいなやりとりで終わる時もあるんですけども、解決までいかないけどまた次に進んでいって、でまた揉めるみたいなことを結構繰り返しているところはキャンプ中あるかなと思いました。

(本田) すごく大事だと思うんですよ。解決を大人がさせちゃうと子供は納得していない。なんかもやしているっていう、モヤモヤを抱えられる態勢。で、なんとかしたいなあと思ったらきっと次のところでまた何かしでかすんですよ。そこで、自分だけでうまくいかない時に友達の力を借りるとか、なんか違う多面的な方法で別に解決じゃなくて、ま、いっか、みたいなところが出てくるとかね。

(山路) グループに大学生のカウンセラーがついてるんですが、6日間ずっと喧嘩し続けた女の子がいたんですよ。3、4年前に。すぐ掴み合っちゃうみたいな感じで。6日間キャンプして、そのカウンセラーはすごく落ち込んでいたんですが、僕は彼女達にとってすごく良い時間だったなあと思っています。その二人は必ず寝る時は密着して隣同士で寝るんですよ。だから不思議だなあと思っていました。

(本田) 気になるからお互い近づいていくんですね。学生さんが落ち込むっていう経験も大事ですね。

(鴨川) なんかこう、正当に対立するとか正当に落ち込むっていう経験が結構今は少なくなっているような気がしますよね。ゲームとかでもすぐリセットしてやり直せるとかっていう。モヤモヤを抱える時間が短いっていうのは本当にそうだなあと思いました。

この全体会、ゲストの皆さんに依頼したのは昨年だったんですね。で、その時はなんとなく社会の中で大人も子供もレジリエンス、たくましさというものが足りていなくなっているなあという危機感があって、で3人の方にお声掛けしたんですけども、その直後にコロナが起き、そしてアメリカ大統領選とか日本の総理大臣の交代とか色々なものが起きてくる中で、これまでも増してしなやかなたくましさとか正当に対立をするとかっていうもののメッセージを強く出していく必要があるのかなあと思って今

回のようなテーマ設定にしています。

それでは、今度は神保さんの方にバトンを渡しまして、千葉の自然災害、台風、大きな被害を受けた中で、自然学校運営しながら子供たちと関わっていった、そんなエピソードを伺っていきます。それでは神保さんよろしくをお願いします。

③ 神保清司 氏 (NPO 法人千葉自然学校 南房総市大房岬自然の家 所長)

千葉自然学校の神保です。よろしくお願いします。今回は自然災害の中での子供たち、大人がどんな感じだったのかという報告になります。

千葉自然学校は自然体験活動で地域を盛り上げていこうというのがミッションですが、県内で3カ所の拠点を持っており、千葉と君津、そして南房総で活動をしています。いわゆる自然の家とか自然公園などの指定管理者という、管理委託を受けてそこにスタッフを常駐させて活動をしている自然学校です。

記憶にまだある方もいらっしゃるかと思いますが、昨年9月に台風15号の直撃を受けた地域です。台風の恐怖に、夜中なんとか家も家族もみんな耐え切って、これ私の通勤路なんですけれども、ちょうど朝8時頃かな、仕事場(大房岬)に向かうとき、車でしたが道路はこんな感じでした。電柱がすべて倒れて通れない。いつもの光景が全く変わってしまっただけで、これは中学校の体育館ですね。風によって壁がぶち抜かれているような状況で、反対側の壁もなくなっていますね。ガソリンスタンドもこんな風。これも私の通勤路ですが、ガソリンスタンドが崩れ落ちている。今もニュースでよく言われていますし、未だにこの被害から立ち直れていない、修復できていない方もたくさんいらっしゃるんです。屋根はこんな形で瓦屋根が全部吹き飛んでしまった家屋も非常に多い状況でした。まず、停電しました。家が壊れました。子供たちにとっては家だけでなく、学校も破損したんですね。校舎が破損してしまったので、10日間学校が休みになりました。

これは私のフィールドの大房岬に向かう途中の道路。木が吹き飛んで道路に落ちているので、ちゃんと通れない状況ですよ。電柱がこんな風に倒れているような風景が至る所に見受けられて、この下を車でくぐるのは結構度胸いったんですね。

私は大房岬自然の家という青少年教育施設を運営しているのですが、建物は、窓ガラスは割れましたけれども、幸い少し復旧すれば稼働はできるだろうなというような壊れ具合だったんです。しかし周りの森は風で木々がなぎ倒されてしまっただけで、普通に歩くことができない。子供たちをこの中に連れ出したり解き放ったりというようなことがすごく厳しい状況になっていました。これはドローンで撮ってもらったのですが、倒れている木々、わかりますかね。竜巻のように通過していったのではなかろうかという状況です。さらに引きで撮ったこの茶色く見えているところ、ちょうどこの境目のところ、ここが境目で、倒れなかった木と倒れてしまった木々が本当にわかりやすくなっています。ここを非常に強い風が吹き抜けていったんだなあということがわかると思います。

木が山盛りで積み重なっていて、この間をくぐるようにして進まない森の中へは入っていけないような状況でした。普通は助けを待たたりするのでしょうが、私たちの場合は自分たちでこれをどうする

か考え始めました。もちろん自分の仕事場も復旧しなきゃいけないですし、職員それぞれ自分の家に影響のある人もいましたし、私自身も家が破損したので、そっちも考えなきゃいけない。それから地域のこともどうにかして、自然学校として何ができるのかということを考えなければいけなかったのも、それらを全てこのスタッフたちとボランティアの人たちとで、どういう風に人を集めてどこに適材適所の配置をしてこれを乗り越えていくのかということ、瞬間的にイメージをして形にしていかなきゃいけなかったというような状況でした。

ちなみに今見ていただいている木は、根こそぎ倒れているんですね。根起こしという状況らしいんですが、地層が薄くて岩盤のすぐ上に木が生えている地域ではこのようになりやすいそうです。木は生きているんだけど、完全に根が起きてしまっているという状況。こんな状況で全貌を把握するまでには結構時間がかかりました。42ヘクタールぐらいある自然公園なので、すべての状況を把握するにはこうやって人の足で歩いて入っていかなくてはならないので、大変な作業でした。ちなみに、この真ん中にいるTシャツに帽子かぶっているのが僕の娘ですが、当時は中学生だったんですが、学校ないので、家にもしょうがないから手伝いに来ないかって誘ったら、すぐに行くよ。やりたいということで、自分の子供たちも連れて出勤していました。

毎日毎日、チェーンソーで木を切る作業が始まりました。最初は、ただただ切っていたのですが、切った後どうやって利用するかということを考え、薪として活用しようということになり、そのサイズに全部切っていきました。今もそれは続いています。

運良く高速道路は繋がっていたので、ボランティアの方々が延べで800人以上助けに入ってくださいました。それからamazonのほしい物リストを活用して、全国・世界中からたくさんの支援物資を送っていただきました。また技術的な支援、例えばチェーンソーを使うことができるとか、高所作業車を持って使うことができるとか、重機を持って行って使うことができる、なんていう方の技術支援をいただきました。更には寄付という形でご支援をいただいて僕たちの復旧活動に活用させていただきました。

この場所は閉鎖の状態だったので、小学校の体験活動の受け入れも1か月間停止していました。そのあと、学校がまた行事で宿泊活動を始めてくれました。でも、フィールドがつぶれているので、どうせだったらいつものプログラムよりは、この災害の状況に対して自分たちに何ができるか？ということを経験するプログラムとして復旧活動を一緒にやりました。かなりの数の学校に支援してもらいました。子供とはいえ数というのはすごいな、って本当に感じました。

こうやって、全国からたくさんのボランティアの方たちに毎日のように入っていただきました。地域の子供たちもいますし、土日なんかは結構遠いところから子供たちを連れて親御さんがボランティアに来てくださったりもしたので、それぞれの役割とか身体能力とか、持っている技術力をこっちで見計らって、役割と達成していただきたい目標を朝のミーティングの場でお伝えしている、この写真はそういう場面です。あんまり写真は撮れなかったんですけど、これ子供たちは何やっているかという僕らがとにかく切りまくった木を、最終的には運ばないといけないんですね。その運び手になってくれているという、そういう場面です。勇気をもらえたと、子供たちの元気な表情がやっぱりすごくエネルギーを周りに与えてくれて。

建物は10日間停電していたので、外にホワイトボードを出して、決まり事なんかも全部決めて、いわゆる安全に関する決まりごとは徹底をして、シンプルにお伝えをし、作業内容を毎日決めて割り振って、ということをしていました。この割り振りが何でできたのかって考えると、やっぱり普段、自然相手

にいろんな活動している中で瞬間的な判断とか、危ないのか危なくないのか、この人ができるのかどうなのかとか、今やるべきか、いややめるべきかという判断を瞬間的に、日々の活動の中でやっているの、そういう中で鍛えられた能力がこういう災害時にかなり生かされたなあと感じましたね。

そして、実は今日これやっているんです。チェーンソー講習会。資格が特に出るわけではないのですが、台風で倒れてしまった木、自然災害でチェーンソーを使わなきゃいけない時、安全にいかにするかっていう基礎基本を徹底してやるという講習会です。今回で4回目かな。満員になったりもします。この台風を経験し、自分に何ができるかとか、こういうことを学びたいっていうニーズがすごくあって、地域内外から講習会に参加する大人の方たちが多くいらっしゃいます。

ちょっと駆け足でしたね。子供たちがどう変わったかっていうと、休校中に僕は自分の子や同級生たちをここによく連れて来ました。普段森の幼稚園でこの岬で活動している子どもたちは、親御さんが自主的にここに連れてきてくださって、今日行くけどなんかできる？うちの子にできることある？って言うので、その割り振りは僕たちがやってそういう子どもたちとずっと活動していました。

そして、うちの子供に昨日、あれどうだった？って感想を聞くんですけど、当時中学生と小学生だった娘たちは結構正直に答えてくれて、大人が必死こいてやってる場面がワクワクしてしょうがなかった、って言うんですね。朝のミーティングなんかも混沌としてるし、でもその混乱の場に一緒に子供が身を置いていて、一人工として扱うので、君がやるべきことはこれ、目標はこれ、わかった？ってそういう扱い方をしていたので達成感があったのじゃないかな。なんかこう役割を与えられることの喜びみたいなものを子供たちは感じていたんじゃないかなと、僕の個人的な感想ですけど。

そんなのが自然災害下での、もちろん命が大事ですが子供たちの成長に繋がるような学びの場にもなりえるのかな、ということは思っています。以上です。

(鴨川) ありがとうございます。チャットに、ボランティアに子供連れて参加しました！という方がコメントくださっています。では、山路さんからお願いします。

(山路) 割り振りをした時に、普段の自然体験が生きたっていう話がありました。で、今回テーマの一つになっている「レジリエンス」みたいなことっていうのが、そう、なんか事が起きてからやるんですけど、それって練習できないじゃないですか。僕らの普段やっている自然体験とか野外教育の中で、このレジリエンス、こう乗り越えていくみたいなこととのつながりって神保さんの中ではどう考えているのかなあと。

(神保) 僕たちは職業としてこういう活動をやっているの、レジリエンスが高くて当たり前じゃないと、多分やっていけないと思っているのですが、参加していただく方たちって、特に子供たちなんかは普段ゲーム漬けの子だっていっぱいいると思うんですよね。ですけど、一言で言うてしまうとこれが適切かどうかわかんないんですけど、僕は本能的なものを子供たちから感じていて、誰かの役に立ちたいっていう時に出る子供なりのアドレナリンがあるんじゃないかと思うんですよ。あとは学校の活動で来た子供達なんかは、チーム制が瞬間的に高まるというか、先生がよく仰っていたのは、いわゆる昔的ですけど

どトっぼい小学生っていまして、僕はそういう子にはあえて非常に難しい課題を与えて、とんでもなくデカイ丸太を運ばせたりするんですよ。危ないんですけど。ですけど、それをやらせたり、ハードルが高いことをやらせた時に一生懸命やっていて、先生がもうやめるぞって言っても、いや、まだできる、あと15分やろうぜって先生に言うみたいな。先生はあんな必死な表情とか息切らしてやっているところ見たことない。だからこういう活動って大切じゃないですかね、なんて言うのを仰ったりしますね。

だから練習できるようなもんじゃないです、確かに。でもその時に出る本能的なものがあって、それをさばいてあげる大人がすごく大事な感じはしますね。

(山路) さばくってというのはどういうことですか？

(神保) 瞬間的にその子の役割をイメージして、与えてあげること。活動の場を。命令ってわけじゃないですけど。だから途中で、あ、これちょっとやりすぎたな、やばいなと思ってやめさせたこともありますよ。

(鴨川) アセスメントみたいなイメージですかね。その子がどんな力があって、どういうことできそうとか。

(神保) わかんない。僕、ほんと瞬間で考えているからわかんないけど。でもね、やることはシンプルなんですよ。木を運ぶとか、どの場所の木を運ばせるかみたいなことですけどね。あと刃物は使わせません。のこぎりを、最初先生だけに渡して腰にぶら下げさせていたんですが、今は子供にも持たせます。

(山路) もう一つ聞きたかったのが、チェーンソーやっていますが、どのくらいから？高校生はやっぱりやってないですか？

(神保) 高校生にやらせることはないですが、身体能力的には全然できちゃうものだと思います。リスク非常に高いとは思いますが、災害時なんかは貢献力としてはものすごい機材なので、そういうのを身に付けている人は、何ていうんですかね、心がたくましくなるというかそんな感じの機材ではあると思います。

(鴨川) ここからは、3人のゲストの皆さんに届いた質問をおたずねしていきますね。

神保さんの方で、子供たちが人の役に立ちたいっていう、子供なりのアドレナリンが出るっていう話がありました。ちょっと本田先生に伺ってみたいのが、本田先生の資料の中で無気力の子が増えているっていうのがあって、その無気力に自然体験はどういい影響を与えられるのでしょうかという質問が来ています。いかがでしょうか。

(本田) まさに神保さんが言っていた、自分のやることを見つけられるんですよ。役割を。無気力っていうのは、俺いなくなってもいいじゃん、自分いなくなっても学校回ってるじゃん。ってこと。

さっきの中間層の話。平均的で学校で言われたことをちゃんとこなしてきたっていうのが今までの日

本人の良い子たち。それを文科省は変えなきゃいけないということで、この4月から学習指導要領が変わって、主体的・対話的で深い学びって。そこにコロナで喋るな、になったから、もう教育現場はどうしたらいいのになっちゃったんですね。

役割を見つけると自分は役に立っている、ってそこに責任感が生まれるんですよ。そうしたらできちゃう。例えば、すごく引っ込み思案で怖がりの子、東日本大震災の時とかね、えっ、てなっちゃう。何したらいいですか？なんて言うと、お前ら何しに来たんだ、邪魔だ！と怒られるわけですよ。

するとじゃあ、ここからじーっと見て誰が今何をやっていて、誰が助けて欲しいかしっかり見て、それを指定してあげてごらんって。そうすると、あそこ、あ、あっち困っている、あれが足りないとなって、あなたのそのちょっと引いた視点が役に立つよ、なんて一緒にいる人がファシリテートできるかどうか。リーダーシップがなきゃダメとか力がなきゃダメとか、積極性がなきゃダメとかっていうんじゃないってね。神保さんは、それを勘で君はこっち、あなたはあっち行けて、直感的に見抜くんでしょうね。そういった体験が子供たちの中で、できる、自分も役に立っている、大人と一緒にいかにできているっていうのが無気力から回復していく中ではとても大事だと思うんですね。

もうひとつ大事なのが、東日本の時の経験で、頑張りすぎちゃった子が3年後に不登校になっていくんです。過剰に適応してこれ以上もう頑張れません、人のためにワーッとやり続けた結果、先生たちもそうなんですけど、フッと足元みて3年後に疲れて。今、宮城県は全国1位の不登校、4年継続していますね。そのくらいしんどいんですよ。頑張りすぎちゃってしんどい。だからそこは適宜山があったらちょっと休む。デブリーフィングのところですよね。8時間やったら完全に1時間は全然違うことをして、また次の1日みたいにできるといいなと思うんです。

(鴨川) そういう意味では、復興作業中の息抜きというか楽しみはどんなことされていたのですか。

(神保) ボランティアの方たちって、お人柄が皆さん素晴らしいというか、自然体験とか自然学校のネットワークで情報を知って、全部自前で来てくださる方がほとんどだったんですよ。ですので、こっちが受け入れしていて心地よく、どうでもいい笑い話も頻繁に起こっていました。そういうのがちょっとした息抜きになっていました。

本田先生おっしゃるように、僕も1月ぐらいにストンと落ちて、気持ちが悪かった。やっぱり言われていたんですよ、東日本経験した方たちから1年後とかにガツンと来て、体にも出たりするから、それはわかっておいたほうがいいよって。気を付けなされてもなかなかね、で1月にやっぱりドーンと落ちたんですけど、でも逆にいうとそこまで頑張れたというか、立ち直ってきた人とのつながりでしょうね。普段から人とのつながりを、災害のために作っているわけじゃないですけど、地域の人とのつながりもそうですし、こういうZOOMとかでつながって、その志が似通った人たちと情報共有しておくみたいなことも大事なことだなって。特に自然災害の時には思いますよね。

(鴨川) 事が起きてからつながろうとしたら、やっぱり遅くなっちゃいますよね。

(神保) そうですね。

(本田) 自然からしっかり学んでもらいたい。例えば老人ホームなんかどこに建てるってなったとき、流されている老人ホームいっぱいあるじゃないですか。建てちゃいけない所に建てているんですよ。もう絶対これ氾濫したら木が流れてくるよって場所に、安いから建てちゃうの。だからそういうところも子供たちにもちゃんとわかるように、家はどこに建てていけばいいのかとか、災害前にきちんとその町をどう作っていくかとかね、震災の後に災害後を考える事業を立ち上げました。そして災害時にボランティアをもちろん送りますが、そこから学ぼうっていうことでいろいろ実際に起こった災害とか自然災害の中で、そこと一緒に共生して生きていくためには日本人としてはどうしたらいいの？ どのような準備を大学生としてやってあげればいいと思う？ どんな力を付けてあげればいいと思う？ っていう、そんな感じのことを日常からやっています。

(山路) 台風のあとね、千葉自然学校のメンバー何人かから、椎の木はやばいっすっていうのをもらって。マテバシイなんですよ、みたいな。そうだよな、っていうことを今思い出しましたね。

(神保) 重たいし硬いし、あのチェーンソーでも結構大変。でもマキとしては最高みたいな。

(鴨川) つながりをつくるっていう話が出ていて、山路さん、一般公募という形で完全に初めましての、これまでの素地がない子供たち同士でグループというつながりをつくっていくと思うんですけども、何か工夫する点というかポイントがあれば教えてください。

(山路) いや、まずそっちの方が良くないですか？ やっぱり既存の関係を持っていてそれをそのまま入れて作るよりは、もともと関係のない同士が環境を作っていくっていう方が、メタファーとしてもまあいいかなーと思っています。子供たちにも、そういうことを大切にしたいから普段の関係じゃないメンバーでグループを作るからねって言っています。あとはそうだなあ、子供たちにもめようとか喧嘩しようとか言っているんじゃなくて、対立が起きたことをなんかこうファシリテートしていくのもそうですし、何かこのグループにはもう 1 本上が必要だなあと思うときは子どもに伝わりやすいような例えとか使ってけんかしちゃえばみたいなことを伝えることもあります。

(鴨川) 神保さんは、学校でプログラムをやっているとその中では対立とかっていうのは起きてくるんですか？

(神保) そこなんですよね。僕のやり方がなんというか結構強引にやっているので、円陣組んでやるぞー！ みたいな感じでいきなり持っていっちゃうので、友達同士で揉めている暇もない感じでやっているから、あんま見ないですね、揉めるのは。ただ、その活動に入らない奴がいるんですよ、必ず 3, 4 人は。そういう奴を見つけると、いいのいたなあとって、もっとレベルの高いことがあるんですけど一緒にやりませんかって話しかける。なーんだよレベル高いのって。いやこれですみたいな。

あとちょっと危ないですけど、わざと僕、刃物を持たせたりしますね。すごくでかいのこぎり持たせて、これこうやると指落ちるから気をつけてねって言うのこぎりで切らせたりする。のこぎりって瞬間的にパワーを使うので、彼らにはちょうどいいというか、発散している感じがします。

(鴨川) ありがとうございます。もっと聞いていたいのですが、お時間が迫ってまいりました。この時間は「全大会 1. 自然遊びで育つたくましさ」をテーマにお届けしました。様々な話題が出てきました。おそらく皆様の感じ方も様々あったかと思います。本日はこの 1 週間の清里ミーティングの種をまく日ですので、ここで今感じたこと、思ったことをぜひ色々な方とディスカッションしてみたいですね。この 1 週間、ワークショップ、あるいは各種企画に参加されて参加者同士でのディスカッションも可能ですし、当然ながらこの中だけで話さなきゃいけないということはありませんから、ご家庭とか職場とかあるいは SNS とかいろいろなところで、皆さんの側が情報提供者となって、今のお話の中で気になったこと、ご自分の考えなんかを発信してみてください。そこで湧き上がる議論がこの清里ミーティングをこの画面の中だけではなく無限に広げていくような、そんな 1 週間にできたらなあと思っています。

全体会 2 「世界の環境教育実践から学ぶ」

- ゲストスピーカー スピーチ&ディスカッション

① レーナ・リンダル 氏 (Link & Learn International 代表)

スウェーデンから参加しているレーナです。コロナで例えば私が日本に行けないとか色々大変な事はありますが、でもコロナがあったからできること、いろいろどんどんやってみるチャンスでもあると思いますから、最初に自己紹介そしてスウェーデンの紹介として自分でこの夏に作った手作りのビデオからいきたいと思います。

スウェーデンの環境教育の特徴の一つは五感を使うことです。子どもが小さいとき幼稚園の時から始まります。子どもたちを自然の中へ連れてい... う木の皮に触ってみたり、その音を聴いてみたり。いろんな音が出ます。草の中で何かが動いています。録音することで音によく気づきます。

このビデオは東京にあるスウェーデン大使館がコロナで誰も来ないから、ちょっと暇が出来たから環境教育を紹介するホームページをつくって、そこでスウェーデンの環境教育の特徴を何か教えてもらえないかということでこの動画を作りました。コロナがなければ思いつくこともないことです。

さて私のスライドを共有したいと思いますが、皆さんは多分なぜこんなに日本語を喋っているのって思っているところだと思うんですが、私は 1989 年に東京に行き、2013 年まで住んでいました。今はスウェーデンのウプサラという所に住んでいます。89 年に日本に行った時は、日本は東南アジアで熱帯雨林の破壊をしているとか、原発をどんどん作っているとか、困ったことをたくさんしているからなんとかしなきゃと思って、日本人の環境意識をなんとか高めることができないかと思って東京に来ました。

いろいろやってきました。今日の話はウプサラの紹介と、この周りで行われている環境教育の紹介、あとはスウェーデンの自然学校のこと、そして最後にスウェーデンのコロナの夏は実は楽しかったという話をしたいと思います。

普通、ウプサラを紹介するときは、あのストックホルムが近くて素敵な大聖堂があるというふうに行っているんですけども、今回は逆に自然の視点から紹介したらどうなるかと考えてみました。10 万年前はこの土地にまだ人がいなく氷河時代だったので、1 キロメートル以上の熱い氷が土地の上に乗っていました。この絵ではこの白いところが氷ですね。そして 1 万年くらい前にこの氷が溶け始めて、氷の下で水が流れてそれと一緒に石とか砂利とか砂が流れて、これが溶け終わってから細長い小さな山みたいに残りました。で私は今そのそばに住んでいます。もう毎日のように仕事の休憩中に細長い山の上で散歩しています。18 世紀、その頃このウプサラの土地にたくさんの人が住んでいて、ウプサラ大学という北欧で一番古い大学ができました。そこで Carl von Linne、さっきのビデオに出てきた植物学者が先生をやっていました。

この Carl von Linne が、先ほどの私の散歩道のところで学生を連れて実際に手に花をとったりして歩きながら自然の中で教えていました。自然学校の活動と近い活動ですね。このすぐそばにある山は自然保護区になっているのですが、スウェーデンにはこれも環境教育にとってとても重要なことで、自然享受権というのがあります。その意味は、土地所有者に関係なく、みんなが自然の中に入って行ってそこ

を楽しむ権利があるということです。ですので、こういうキノコを取るのは自由です。今 12 月の初め、つい先日でもこんなキノコが取れて、もう何回も食べています。

スウェーデンの環境教育あるいは野外教育の中で、日本で多分一番有名なのがこの『ムツレ』という、日本語の本も出ているし、日本のリーダー養成講座も行われていて、既に 1 万 2000 人ぐらいの子供がこのムツレ教室に参加しています。その教室は、5 歳ぐらいの子供を相手にムツレという森の妖精の話から始まって、このムツレが森から出てきて子供たちにいろいろ教えていくという流れです。私の近くにも、実はここから 20 分くらい自転車で行ったところに、この森のムツレの国というのがあります。全くオープンで誰でも利用できる場所です。

この中に色々工夫があって、例えば「この丸太の上でバランスを取りながら歩いてみてください」そうしたら動物の中でバランスを取るのがとても上手なリスがいる。暗い時に撮ったから見えにくいけど、木で出来たリスがそこに置いてあったり、またここでは「動物はどれくらい飛べるか」この丸太の横で飛んでみてくださいと。ウサギはここまで飛べます、人間の中では女性の一番飛べる人はここまで、男性はここまで飛べたと。あとは自分で飛んでジャンプしてみてくださいと。最後にこのムツレの小屋。ちょっと休んで下さいって感じになっています。誰でもいつでも行ける所です。

私は今スウェーデン人のパートナーと一緒に住んでいるのですが、彼は子供の時にこのムツレ教室に参加しました。これはその時の卒業証明書みたいなもので、彼はまだ大切に持っています。今、彼は環境系の仕事をしているので、こういった体験が少し影響したのだろうと彼自身は思っています。

次にスウェーデンの自然学校について紹介したいと思います。スウェーデンの自然学校は日本の自然学校とかなり違うので、そのポイントを説明したいと思います。

スウェーデンには自然学校が 90 校ぐらいあり、多くは自治体と深い関係があります。学校の教員が自治体職員になっているところもあるし、その自治体から予算が出ていることも多いです。そして、義務教育の学校を対象に活動しているので、必ず学校のある所、町に近いところにあります。

自然のことはもちろん教えたりしていますが、特に強調しているのは自然のことだけじゃなくて、自然の中で他のことを教える。学校で学ぶことを教える、それは数学だったり国語だったり英語だったり技術だったり。このように自然学校の先生たちが、学校の先生のための指導書も作っています。手法の提案ですね。自然学校は普通の学校のためにあるので、子供たちは普通の学校の時間内で先生と一緒に自然学校に来て、そこでたとえば数学などを学びながら自然を楽しみます。その自然学校の活動内容も国が決めた学習指導要領に合わせていて、教育目標というのがあるのですが、その目標を達成するためにいろいろ工夫をしています。日本のように決まった教科書などを使うのではなく、目標達成するのであれば学校や先生は好きな教科書や教材を使うことができます。本を使わずに自然を教材に使うこともできます。

これは日本でも注目された、小さい子供を相手に数学を教える『野外で算数』という本、日本語になっています。この翻訳に私は関わったので、この自然学校との縁ができたのですけれども、北海道の当別エコロジカルコミュニティの山本さんが今これを使ってワークショップを開いています。

また、外で英語を教えるってどんなことかという、これは日本からピースボートの参加者が視察に来た時の写真ですが、この二人が英語の練習をしています。彼女は枝とか松ぼっくりで一つの絵を作ります。そして後ろの彼は同じ材料を持っているのですが、彼女はその材料を持ってこの絵を作るように英語で説明しないとはいけません。完成するまで。

これはウプサラの自然学校。風除けをつくって火を焚いて、そして食事を作るという授業でした。ここで何か食べたりしているというのが分かると思います。また、こんなこともやっています。この土地は自然保護区にすべきなのか、それとも今とつても必要とされている住宅にすべきなのか。それぞれ役割を与えて、そして議論の練習をします。スウェーデンは移民が多いので、新しくスウェーデンにきた子供たちに自然と付き合う文化を自然学校が伝えることは重要な役割になっています。

コロナの中で自然学校はどうなったか、3カ所に聞いてみました。そうしたら、大体いつものような活動をしているのですが、一番困ったことは公共交通を使えないことです。ストックホルムでは、公共交通地下鉄で子供が学校に来ることができないので、結局歩いて来ることができる子供相手の活動に切り替えるしかありませんでした。別のところは市バスと電車で子どもが来ることができないので、逆に先生が自転車で学校に出かけているようです。

ウプサラの自然学校はとても恵まれていて、100%自治体から予算が出ています。そこで働いている3人は市の職員で、職員は公共交通で行けるのですが、子供の団体はバスに乗ってはいけないことになっています。そうすると、「自然と文化のバス」というシステムがあり、自治体がバス会社と提携して学校が子どもを例えば博物館に連れて行く時にそのバスを予約できて無料で好きな時間で行きたいところに行ける。このシステムをコロナの中で利用できるのです子供たちは無事にウプサラの自然学校に来られるようになっています。

コロナが始まった頃は、みんな不安なので学校からキャンセルが入ったのですが、子供がそんなに感染を広げないし、自然学校は外で一番安心だから、博物館とかみんな閉まっているのもあって、逆に非常に忙しくなったということです。

最後にちょっと楽しい話をしたいと思います。日本でも有名で、他のヨーロッパのようにロックダウンしませんでした。一つの理由は、憲法によって市民の移動の自由を制限できないというのがあります。だから一度も家から出て行かないで下さいって政府は言っていません。むしろ、健康に良いからぜひ交流しない形で、自然を楽しんでくださいということです。

春は一時期、2時間程度の旅行をしても良かった。公共交通を避けるということでみんなが近くの国立公園とか自然保護区とかで楽しむようになりました。観光案内所も、以前やっていたような外国人向けの宣伝ではなく、一生懸命市民向けに自転車でウプサラを発見しましょう、みたいな今まで全然やって来なかったことをしていました。

そしてスウェーデンの人はとても有給休暇に恵まれていて、コロナが来た時は夏の休みに向かっていたので、HEMESTER という家と休暇を一緒にした言葉で、外国に行かないで国内で休暇を楽しみました。

ですからコロナの夏は人を相手に出来ないから、自然を相手に楽しんだり、そしてみんなが修理とかしたり、人のいないところに行ったりして。そして夏が終わってウプサラに戻ると、またここで実がいっぱいできて、市も市民にりんごを取ってもらった方がいいと道具を置いてくれたり、いつもよりはたくさんジャムなどを作ったりしました。

コロナの後はただ普通に返るのではなくて、よりサステイナブルな社会に戻りましょうっていう話が結構でています。グレッタさんの世代は選挙権を持つ前、学校を卒業する前にも活動し始めていて、一方ムッレ教室を受けた50代後半の、社会のいろんなところ政治家とか会社の社長とかそういう人たちは沢山いるので、この両世代が共通の認識で動いたら面白いんじゃないかなあと私は思っているところです。はい、じゃあこんな所で終わりにしましょう。

(西村) レーナさんありがとうございます。自然学校の話、学校との連携、科目との融合など非常に興味深い話をいただきました。それからコロナ下でのスウェーデンの人たちの過ごし方、非常に印象的でした。ありがとうございます。ではまた Q&A のところで登場していただきたいと思います。

では続いて 2 人目、アメリカのカリフォルニアからつないでいただいております。トッドさん、よろしくお祈いします。

② トッド・ヒサイチ 氏 (アメリカ国立公園局 パークレンジャー)

トッドです。よろしくお祈いします。

私は大阪の出身ですが、レーナさんが日本にいる間ぐらい、海外にいますので日本語がちょっとボロボロです。みなさん上手く解釈しながら聞いてください。

私はアメリカ国立公園でパークレンジャーとして勤務しています。アメリカの国立公園というと皆さんグランドキャニオンやイエローストンなんかを思い浮かべると思いますが、正確に言いますね、アメリカの国立公園の目的は、自然環境の保護、その資源の保護、そしてそこにまつわる思想、歴史も保護し、そのうえで皆さんの楽しみのため、楽しみといっても観光とかアウトドア活動、森林浴する方もいると思うんですけど、場所によっては教育の機関でもあります。今日はミユアウツズを例にとりて、環境教育かどのように実践されているのかを私の視点から紹介させていただきたいと思ひます。

ミユアウツズは私の担当勤務地なのですが、レッドウッドという非常に背の高い木がカリフォルニア州の太平洋側に沿って生えています。場所によっては 100 メートルを超える高い木で、その歩道を歩いて森を鑑賞するという場所です。来られる方はみんなこういう姿勢になります。年間で 100 万人近くの人がか来られて、森を楽しみ、棲んでいる動植物のことを勉強したり、歴史を学んでいきます。

カリフォルニアではゴールドラッシュがあり、世界中から人が集まってきて木は伐採され、サンフランシスコの街ができて、世界中にこの木が輸出され、アメリカ経済を支えた資源でもありました。この森はたまたま谷の中にあつたので、そこを買い取つた人が政府に寄付したおかげで現在国立公園があるわけです。

ビジターセンターに行くと、レンジャーが入口でいろいろなパンフレットを持っていて、興味のある人たちに冊子を渡して、自分たちのペースで森を探検してもらい、そして最後にレンジャーとお話して

このメジャーバッチが授与されるというシステムになっています。

このシステムを知っている人たちは自主的に勉強できますが、知らない人はそのまま森を楽しんで帰ることになります。コロナの感染が収まらない限り、当分この状態で活動をしていくことになります。

また、学校のカリキュラムとして、レンジャーが学校の先生と協力しあい、先生が森について授業でお話しして、今度は森に来てもらって自然のことだけでなく、一般の教育も森の中で行う形態もとっています。今はコロナで来てもらうことが出来ないので、Zoomを使ってやったりもします。

一般の人にはレンジャープログラムで森の資源や歴史と深く関わっていただけるように工夫しています。こういうのはインタープリケーションと言うのですが、その形態が少し変わってきています。これまでは、レンジャーが一方的に話すような形だったのですが、それだと多様化している世界に対応できなくなっており、プログラムを受ける人たちを主人公にしてプログラムを行っています。

レンジャーの技術にもよるし、全部が全部くる人全員が参加できるわけではないので、ちょっと難しいところですよ。いい方法はないかいつも考えているのですが、研修生の2人がちょっと提案をしてくれて、2人とも美術、絵が好きなので人に絵を描いてもらう機会を与えたいと。今までそれ全然なかったもので、よくわからなかったんですけど、遊びの精神でやってみましょうっていうことでやってみました。プログラム名前を「art in the park」っていう名前にして、蓋を開けたらですね、大反響で。週末だけこのプログラムを提供したのですが、もう一日中休みがないくらい来る人来る人みんなが絵を描いてくれて、しかもみんな結構真剣に。

この人なんかは描いた後に絵のことを説明してくれました。サンフランシスコからこの橋を渡って、サンフランシスコ湾の上を運転してミュアウッズに来て、これは絵葉書みたいで、楽しい絵です。描いている時は真剣でしたが、話している時は生き生きと笑いながら話してくれて。

中には結構深いのもあって、題は『しわ』っていうんですけど、人間にしわがあるように木にもしわがあって、こうやって木を眺めてみると一つ一つ違うんだということに初めて気付いたと言うんです。これを描いた人は自然にあまり興味がなかった人で、こういう風にして自然の中に居たのはこれが初めてだったみたいです。

次の絵は、ステラズジェイと言う一般的によく見られる鳥です。題名がですね、『奇妙な鳥』。あのすごくきれいな鳥ですよ。でも、題はあえて奇妙な鳥。なぜ奇妙なのかというと、この鳥は綺麗だからみんな餌をやるんですね。本当はしちゃいけないんですけど。そうするとどんどんこの鳥が森に集まってくる。そうすると絶滅危惧種の卵を取ったりする。だから皆さん、自分のやっていることに悪気はないんですけども、やっていることに対して悪い影響があるというのはわかっているのでしょうか？と書かれています。

次の絵は、4枚を貼り合わせて一つの絵にしているのですが、レッドウッドを見にくる人たちは皆、首をグーッと上に向けて見るのが一般的。描く時も書いていると紙が足りなくなるんですね。だからもう一枚くれって言って、紙をこうやって繋いでいくの。題名は『redwood プリズム』っていうのですが、なぜプリズムなのかというと、描いた人はニューメキシコの砂漠で育った人で、今回砂漠じゃない環境に来たのは初めて。だから、この人には世界にはこんなに色があったっていうことに初めて気づいてプリズムとつけたわけですよ。

これ最後になりますが、モーメント オブ リフレクション。リフレクションは日本語にすると2つ意味があって、1つは反射という意味、もう1つは想いにふけるっていう意味があるんですけども、この人の場合、高さもですが、この川に写っているものに興味をそそった。川にいる鮭、鮭の生存、我々がどういふふうに住んでいるか、この公園の周り、どういふ風に管理していくかということによってその生存が変わってくる。だから川が我々の行動を反射しているということは、我々の行動は環境に影

響を与えているという風に結構、意外と考えさせられる絵だったわけです。

このプログラムから得たことっていうのは非常に大きくて、遊び心を出して良かったなと思ったのです。いろんな人が気軽に参加してくれましたし、コストもほとんどかからない。イチヤとグレーが美術のバックグラウンドがあるので、色の作り方を子供たちや参加者に教えてくれて、あと使ったのはみんな廃品ばかりで、リサイクルショップから買ったような絵の具と筆とそれから廃品のペットボトルとかプラスチックの容器の蓋とかをパレットにして、あとは紙ぐらいですね、必要だったのは。

それに結構みんな真剣に絵を描いているので、すごく静かになって鳥の声が聞こえたり水の音が聞こえたり、大変自然保護にいい影響ができました。

そしてコミュニケーション力が養成できた。絵を描くっていうのは、絵を使ってコミュニケーションしているわけで。それに、イチヤとグレー、2人のボランティアインタープリターが他の人たちにインタープリテーションするので、彼らの力の養成にもなりました。

それから我々にとっても新しい方法だと思うので、インタープリテーションのコースの可能性が増えました。一番の成果は、コミュニティ形成ですね。来る人が公園と繋がった。訪問者同士が繋がった。我々とつながった、これがコミュニティ形成として非常に興味があるところです。

ミユアウツズの環境教育の形をお伝えしましたが、私のミユアウツズでの経験、それから他のアメリカ国立公園での経験、アフリカのセネガルってところで2年間環境教育を行っていた時の経験を通して、個人的な見解ですけども環境教育とはって考えたときにやっぱり、環境、自然それから地球は命があるものだと理解することが環境教育じゃないかと思っています。

地球に命があるならば、我々にも命があります。自分に命があって、他の命あるものと影響し合うわけじゃないですか。この関係性によって、良くも悪くもなる。こういう風に環境教育を考えています。

今回のテーマじゃないですけど、真剣に取り組む事があれば、真剣に遊ぶことがあれば、にっこりするじゃないですか。で、にっこりしていると今度は考えも変わってくるし、理解が深まってくると行動も変わってくるので、笑って世界を変えていけるのではないかと思っています。ありがとうございました。

(西村) トッドさんありがとうございます。私も昨年まで1年間カルフォルニアにおりましてミユアウツズを訪ねました。イチヤさんがやられたプログラムは印象的で、僕は初めて知ったんですがほんと素敵なプログラムです。最初に示してもらった、ゴールデンゲートブリッジを描かれた男性の写真がありますよね。その下にちょうど experience America っていうメッセージが出ていました。まさにアメリカを体験して描いたぞっていうような感じに見えました。その1枚に僕も感動しました。

次にいよいよ日本代表ということで、岐阜県美濃市から登場していただきます。

③ 萩原・ナバ・裕作 氏（岐阜県立森林文化アカデミー 准教授）

皆さん、こんにちは。

森林文化アカデミーってところで、教員をやっております、ナバと言います。

7月に morinos という場所が出来ました。今日はそこを作るにあたってのお話を皆さんにしながら、どんなことを見てきて、どんなことを考えてできてきたのかということをお知らせしたいと思います。

この場所、森の巣です。みんなの森の巣になるようなところになったらいいなということでこの morinos という名前もインスピレーションで同時に溢れてきた名前だったんです。これいいねっていうことで、みんながここで森と触れて育って、そしていろんなとこにまた遠く旅立って行って、またここにエネルギー充電しに帰ってきてみたいにそんな巣になったらいいなってことでこの名前が出来ました。

コンセプトとして最初に、すべての人と森をつないでいきたい、そんな繋いでいくベース、巣みたいなところを作りたいなあというふうにある日、無性に思いはじめまして、岐阜県は木の国、山の国ですからこんなにステキなりソース、森があるのにあまり人はその良さに気づいていない。勿体ない、そういうふうに思い始めました。僕の中で見てきたこと、感じたこと、こうだったらいいよね、ああだったらいいね、みたいな妄想だとか、或いは目の前で起きている課題であるとか、みんながどんなことに喜んで、どんなことを必要としていて、みたいなものを全部参考にしながら、森の中から新しい文化を作っていこうと思っています。

もう 10 年以上前になりますが、日本の子供たちを連れてハワイに行きました。パークレンジャーに参加したときのことで。ご存知の方もいると思うんですけども、ハワイの国立公園のプログラムを受けてすごくショッキングでしたね。すごいなあと思ったのが、理解してもらおうとか、映像を使って伝えてくるのかなあと思ったのですが、その方は 2 種類の火山の事を説明するために子供たちに声を出させるんですよ。日本の子どもたちに。一つの種類がウーだとしたらもう一つはウォーだったり。

彼がこの火山の説明する時にちょうど同時に音を出させるっていうような、多分、受け手の子供たちは頭じゃなくて感情とか気持ち、頭以外の部分でそのプログラムを受けていたんじゃないかな。そんな彼のプレーを見て感じたのが、やっぱり頭じゃなくて体全体でメッセージを受け止めてもらうってことすごく大事だろうな一ってことを学びました。

それからもう一つ彼がやったのは、ハワイは島国ですから在来の植物が外来の植物に弱い、どんどん外来植物にやられてしまうっていう問題があって、そういう問題は話で聞くことはよくありますよね。でもここでやっているのは、海外から来た植物をみんな引っっこ抜くわけですよ。国立公園の中では、採ってはいけないみたいな、そういうイメージがあったのですが、抜くわけですよ。子供たちも最初は戸惑うんですね。ここ国立公園だからダメなんじゃないって。なぜこれを抜かなきゃいけないのかというと、それはやっぱり口とか頭、耳で聞くだけのものではなくて実際に行動をしながら説明を聞くとすごくインパクトがあるものだなあと思って。

こんな風なアメリカのパークレンジャー、素晴らしいなというふうに思ってよしこれは参考にしようと思いました。

次の国はドイツですが、実は森林文化アカデミーはドイツにあるシュヴァルツヴァルトという黒い森で知られるバーデンヴェルテンベルク州と連携を組んでいまして、頻繁にドイツに行く機会があります。そこで見てきたものの中にもいろんなヒントがあったので紹介させていただきます。

まず、これ、日本であまりこういうところは無く、ぜひこういう場所が増えたらいいなと思うのです

が、英語で訳すとユースファーム、まあ青年の農場で、日本語では昔、子供農場と訳されていたのですが、実際に行ってみると住宅街の近郊に、動物はもちろん、畑があり、木工できる部屋もあったり、その中に幼稚園がありキッチンがあったりって、そして幼児から子育てのお母さん、学校帰りの小学生・中学生・高校生、みんなが集まってくる場所なんです。

通ってきては掃除をして、それから乗馬をしたり、あるいは年上の子が年下の子に馬の世話を教えたり、あるいは木工やったり陶芸やったり、馬のフンを使った畑を耕して、なんか食べ物を食べたりみたいな暮らしがここにはあります。環境教育を伝えていく上で、やっぱり暮らしが変わっていかないと何も変わらないので、こういう場所にはニーズがあるのではと感じました。それから morinos のモデルにもなった、ハウスデスヴァルデス、ドイツ語で言う“森の家”という建物です。ドイツが森の家なら日本は森の巣だろうというわけではないのですが、ショッキングだったのは、いわゆる森が好きな人だけが集まるというよりは、週末にバーベキューをやっていたりとか、あるいは美味しいケーキ大会みたいなことをやっていたりとか、先ほどのトッドさんのプロジェクトのようなアートの時間があったりなど、いろんな切り口のプログラムがここで展開されていて、遊びに来たら隣で面白そうなプログラムをやっていたみたいなの、そんな施設なんですね。森が好きな人も来れば、スポーツが好きな人も来る。食べ物が好きな人も来れば、子育てに興味のある人、木工が好きな人が来たり、いろんな人が自然に混ざるような場所です。僕がイメージしていた、それに近い場所だったので、非常に感動したのを覚えています。

ちょうどこの日はストーリーテリングの大会をやっている隣で、ケーキとか紅茶のクラブが味自慢をやっているわけで、演劇セッションの後に食べに行ったり、新たな交流が生まれる、そういった人が重なる場所というのはすごく大事だと思いました。

それから、ここも僕の理想郷のようなところなのですが、同じドイツのプレッツという北の町で、放課後の森の小学校、放課後の森の教室みたいなのを毎日やっていました。月火水木金、毎回違う子供たち、20~30人の登録制で月曜日のグループ、火曜日のグループって感じで、毎回同じメンバーが定期的集まって森で過ごす。もう本当に家族のような感じで、こういったプログラムが非常に人気があって、ウェイティングリスト上で、このプログラムがあるからこの小さな町に移住する人たちもたくさん出てきているようです。

ここで感じたのは、イベントも日常に近いものをやる。それからファミリー、トッドさんもコミュニティって仰っていましたが、コミュニティ作りをしていくのは非常に大事だなと感じました。

そしてお次は、スウェーデン、レーナさんの国です。ストックホルムの南にある自然学校を訪れました。これが自然学校を立ち上げた中心人物のマットと言う素敵なおじさんです。彼がまさに先ほど紹介されていたカールリンネに扮装して、子どもたちに理科の授業をやるわけです。理科だけではなく国語算数あるいは英語を森の中で展開していくのですが、とにかく毎日のように地元の小学生が交代でプログラムを体験していきます。驚いたのは町の給食センターも、今日は〇〇小学校の何組が来るからということでそこに給食も配達されるという本当にひとつの教室になっているのです。いつしかこういう自然学校が各学校区内にできるといいなと思っていて、こういったことも目指していきたいなと思っています。

環境教育というと、例えば営業しに行くと、じゃあ総合学習の時間、みたいな感じになってしまいがちですけども、いいところで理科ですよ。ところがやっぱり、国語・算数とか英語とかそういったものを野外で学ぶっていうのは実感を伴って学ぶことができたり、実は野外では結構学べる様になって

いたりして、いわゆる落ちこぼれになりがちな子の数が減ってくると言われています。子供たちって、いろんな得意とする学び方のスタイルがあるので、読み書きで覚えやすい子もいれば実際にやってみないと、見ないと、触れないと、あるいはアートを通してやらないと理解しづらい子もいて、そういったことをリアルにできるということで、山本さんがこれを翻訳で紹介されて以来、アカデミーでも毎年のようにワークショップをやっています。

今後は、公教育のアプローチも必要だなと思いました。morinos もそうですけれども、やっぱり来てもらえる人っていうのは相当意識が高い人ですよ。圧倒的の大多数の人が、そういった体験を全くせずに、触れずに過ごしてしまいがちなのを、既にたくさんの方が集まっている公共の場に僕たちが乗り込んでいくっていうのがすごく大事なことだろうと思っています。

それからイギリスにも行きました。一つの理由が、イギリスにも環境教育の優れた指導者育成プログラムがあって、フォレストスクールと言われています。メインは小学校の先生が、イギリスの場合は近郊にいろんな雑木林があったりするので、そこをフィールドにしていろんなことを学んでいこうということなんですけれども、この指導者育成プログラムが非常によくできていて、多角的に学んでいきます。子供っていうのはそれぞれ違う学び方をしているので、いろんなパターンに合わせるためにこの指導者育成の中でもアートを使ったり、論理的にやってみたり、徹底的に体験してみたりなど、体系立てられたプログラムになっていました。多分僕らは今まで結構偏った方法でインタープリテーションしてきたような気がしていて、もっとこれを意識的に広げていく必要があるのかなと感じました。

そして最後、ウェールズの小学校では休み時間に、子供たちがプレイパークのようなところでガラクタのような遊び道具でぶわーっと遊びを始めるわけです。遊具で遊ぶよりも自由に遊んでいるように見えました。おもちゃで遊ぶ、遊具で遊ぶっていうのは、実は受け身なんですよ。ところが道具とかこういったもので自由に遊べるようになるってことは、ゼロからイチにできたり、目の前にあるものを使って自分たちで作り上げることができる。これは大げさかもしれないけど環境教育でゴールにしている、行動して社会を変えていく、ということに近いんじゃないかなと思っています、誰かが何かしてくれると思って待つんじゃなくて自分たちで楽しい社会を作っていく、そのきっかけになるんじゃないかと思って見ていました。

こうした体験や気づきを元に morinos の骨格なるキーワードを書きました。

- ・学ぶんじゃなくてまずは楽しもうよ
- ・僕らはつい教えようとしちゃうけど、まずは楽しむことを大事にして
- ・それから体験学習
- ・体験から実感しながら学んでくことを大事にしていこう
- ・全体的にホリスティックに学んでいきたい
- ・そしてどんどん、とんがっているような実験していきたい
- ・できたりソース、ノウハウをどんどん公開して、社会にどんどん広げていって
- ・みんなハッピーになっちゃう

みたいなことですね。

そしてこれも最後まで大事にして死守したいのですが、とにかく変化し続ける施設であろうと。

時代に合わせて、今日の前の事を捉えて変化し続けるものにしていくということを大事にしています。

そして、僕らが何かプログラムを作って提供する施設ではなくて、みんなで作っていく場所にしたい。ずっと一生作り続けていくような場所にするので、大きなコミュニティになっていったらいいなと思っています。おかげさまで7月に morinos オープンしました。

皆さん是非来てください。森で会いましょう。

(西村) 残りの時間で3名のパネリストの皆さん、カメラをオンにさせていただいて Q&A に行きたいと思います。まず、レーナさんに質問です。自然学校と学校の関係はどうなっていますか？学校の教育課程の一部として自然学校を利用するようなイメージですか？一つの自然学校が何校ぐらいの学校を相手にしているのでしょうか？という質問です。

(レーナ) 各自治体で状況は違うんですけども、ウプサラでは3~9年生(9歳から15歳ぐらい)の学校のクラスを3回受け入れることが目標としてあります。だけどウプサラの学校が自然学校に生徒を連れて行く義務はないので、各学校が申込をしていくのですが、昨日その先生と話していたら、そこは職員が3人でウプサラは20万人ぐらいの街で、目標達成するための職員が3人では大変のようです。でも義務ではないから申し込んで来ない学校もあります。学校の担当の先生と子供たちと一緒に1日くらい活動をして、このほかにまた幼稚園の先生とか学校の先生向けの研修も行っています。教育活動でそういう野外教育の手法を使えるように、でもそれはどれだけ実際に使っているかというのは誰もフォローしてないからよく分からないと言っていました。

(西村) トッドさんにはですね、絵の具は3原色だけっていうのは素晴らしいアイデアだなとか、日本だったら俳句を作る時はまずその場所を歩きますとコメントを頂いています。園内を回ってもらった後にその想いを絵にしてもらうのが良さそうですね。それから、ナショナルパークでのボランティアとかインターンの制度のことを教えていただいてもいいですか？

(トッド) ボランティアの方は特に決まりがなく、週に1回の人もあります。週に2、3回来てくれる人もいます。その人のスケジュールにあわせてこちらのスケジュールを組むという形です。インターンの研修生は、フルタイムでうちに来てくれた人たちはほとんどレンジャーの仕事に就きます。

(西村) ボランティアやインターンのトレーニングの機会とか、或いはインターンになるためのハードルやステップみたいなものはあつたりするのですか？

(トッド) やらないとわかんないと思うので。それから技術とかその人たちの学歴とかそういうものよりも、どれだけやりたいかっていう情熱を重視しています。

(西村) トッドさん自身もインターンから仕事を始めたわけですね。最近ゴールドゲートナショナルパークエリアのフェイスブックの記事を拝見して、トッドさんがボランティアをどう捉えているかみたいな事が、記事の中で書かれていて、素晴らしいなと読ませていただきました。

(トッド) ありがとうございます。

(西村) 次はナバさんに質問です。ナバさんが理想と言っていたドイツの活動ですが、毎週実施している森の小学校では具体的にどんな活動をしているのでしょうか？

(ナバ) プレイパークに似ていますね。環境に恵まれていて、住宅街で集合し20~30人がリアカーを押してフィールドまで行くと、そこには道具があったり砂場があったり、そこで子供たちが自由に過ごします。ヤギもいて、その中で子どもたちが自由に遊びを作り出していくという感じです。

(西村) 子供たちが今日はこれしよう、あれしようとか自分で決めるっていうわけですね。

(ナバ) その中で、縦割りでそこで十何年育ってきた子が高校生、大学生になって、リーダーじゃないけど一応こうやって見ているんですけども、なにかプログラムを提供するようなことはしていないです。

(西村) morinosでの活動もやはりそういう方針ですか？

(ナバ) そういうものもありますし、プログラムのなものも両方ありますね。やはりプログラム活動が多いので、そうじゃない活動を展開してバランスをとっていききたいなと思っています。

(西村) 近所の子供たちは放課後、自由に来たり。

(ナバ) 週末も泥、穴を掘るためだけに来る子もいます。

(西村) 子どもは穴掘るのが好きですね。

(ナバ) 僕も穴があったら入りたいです。

(西村) 3人にそれぞれ聞きたいですね。今日のテーマでもあるのですが、遊んで笑って世界を変えるために大切にしている価値観や要素は何でしょうか？

(レーナ) 価値観は自立だと思いますね。スウェーデンの学校も自然学校も、それぞれが自立して自分で意見を持って人に伝えることができ、人のことをよく聞き、相談しあって一緒に社会をつくれるような人を育てようと。そのために一人ひとりが自立を、自信を持ってないと行けないと思います。

(西村) 自立は子供の時から育まれるっていうか、いろんな体験を通して育まれるわけですね。急に自立しなさいっていてもダメだから。

(レーナ) もちろん。日本からのお客さんを視察で幼稚園に連れて行ったりするときは、時々コメントとしてあるのは、子供が転んでいるのに何故保護者は手伝ってあげないのって、冷たいって。それにはちゃんと目的があって、それは必要以上に手伝うんじゃないで、子供は自分で立ち上がることができるんだっていう自律をするためだと。

(西村) なるほど。ありがとうございます。ではトッドさんいかがですか。

(トッド) 私が考えるのは真剣に遊んで、真剣に笑う。ある時点でひらめきがあったり、できないことができるようになったり、人とつながったりして笑うことじゃないですか。そうすると意識が変わって、行動も変わって、世界が変わっていくと思うんです。真剣に遊びましょう。

(西村) グランドキャニオンに行った時は、大人も命がけで遊んでいるっていう印象だった。本当に真剣に、1000メートルの断崖絶壁に登る、真面目に真剣に遊びに取り組むって感じでしたね。ありがとうございます。はい、じゃあナバさん、遊んで笑って世界を変えるために大切にしていることは？

(ナバ) 一人で遊ばない、1人で笑わない、巻き込む。やっぱり一緒に遊ぶ体験、共通体験ほど強いものはないし、一緒に笑うほど心通じることはない。僕は県立の行政の中において、一応立場的には県立職員だけど民間の人みたいなものですよ。頭の中クレイジーだなと思うけど、そんな人面倒くさいけど一緒に笑ってとにかく時間を使って一緒に対話する。それがだんだん理解につながってくる。それがあるおかげで今 morinos があって、morinos に被害者の会っていうのがあって、よくも悪くも皆腹をくくって新しいことやろうって思ってくれている。やっぱり人間だからみんな、そこだと思います。

(西村) 僕が印象的だったのはドイツの人たちも、それからレーナさんが紹介してくれたスウェーデンの森でも必ずみんな輪になって座って対話をする。寒いときは火を囲んだり、一つの話をつづたりっていうね。なんかそういう輪がずっと見えると思うし、それからトッドさんが今取り組まれているナショナルパークの中の、新しいコミュニケーションの作り方って言ったらやっぱり対話を大事にして輪を作って一人一人と対話するっていう、そういう文化を育ててきているのだからという印象があります。そこにやっぱり笑顔があって笑顔の中でそういう文化が生まれ、社会が変わっていく、そんな感じがしました。

もう残り時間が無くなってきました。チャットにたくさん質問をいただきまして、ナバさんにも来ているし、トッドさんにも森林火災のこととか、レーナさんにはスウェーデンのコロナの対策のことなんかもご質問をいただいているんですけども、済みません、エンディングの時間になってしまいました。

では最後に、来場してくれている皆さんへのメッセージということで一言ずつ頂戴したいと思います。

(レーナ) それぞれの国に自然と付き合う文化があると思うんです。アメリカは国立公園がすごく大事。アメリカの国立公園ができたおかげで、スウェーデンにも数年前に国立公園ができた。スウェーデンの一つの文化は家族と一緒に気楽に自然に出かけて、ベリーを摘むっていうのがあるんですけども、日本も独自の文化があって、自然学校には都会で育った子供で、長靴も持ってない、自然に一切行かないという子供も来るそうですね。そこで自然学校はすごく大事な役割になって、家族で得られないような自然と関わる文化を自然学校で触れる機会があるんです。これからの自然と関わる文化を、それぞれの国でどうやって維持して育てていって発展させることができるかというのを考えていくのが良いと思います。それは楽しいことだと思います。自然と関わる文化を育てましょう。

(トッド) レーナさんが言われたように、各国、国の中でもいろいろな文化があって、アイデアをもらえるところはいっぱいあると思うんですよ。いろんなコミュニティが一緒になって、環境のことを考えていくのが大事じゃないかと思うんです。人間の世界では国とか国境とか境がありますけど、環境にはありませんから。地球はひとつじゃないですか。今回コロナで実感しましたが、地球が一つになっている。その国の問題はその国の問題だけじゃなくて世界中の問題になっているので、地球全体の問題で、気候変動もそうですし、だからこうやっていろんな人たちがチームになって、地球全体がチームになって環境のことを考えていかないと環境は悪化していく一方じゃないかと思う。

その反対に力を合わせれば、良くなっていく一方だと思うので、今回こういう機会をいただいて、参加できて非常にうれしいです。みんなゴールは同じだと思うので心強いです。

(ナバ) ということで、みんなで楽しく巻き込み型で変えていこうよっていうのが一番です。楽しい方向に変えていく、良い方向に向かって、と言うのが僕のメッセージです。

(西村) みなさんありがとうございます。

82名の皆さんに聞いて頂きました。本当にありがとうございます。スウェーデンから、カリフォルニアから、岐阜から、私は京都からですけど、一つ地球の上で、インターネットで結ばれてですけども、このひとつの大地を共有して、そして持続可能な未来に向かって一緒にやっていかなきゃいけないということを改めて実感しました。

それから新しいチャレンジがそれぞれのところでやられている。新しいアイデア、創造性こういったものもどんどん取り組まれているということですよ。お互いに刺激しあって、いいものを取り入れ

て、それぞれの実践に繋げていることが素晴らしいなと思います。

こうやって1年に1度、本当は清里で集まれば良かったのですが、インターネットで結びながらお互い刺激し合えたということで、とっても有意義だったなあと思っています。300人もの関係者が1週間ずっと集って、一緒に学べたこと、笑顔で過ごせたことを嬉しく思っています。

本当にみなさんありがとうございました。パネリストの皆さん、ありがとうございました。

拍手でお礼を申し上げたいと思います。